

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 629 集

や かた  
**屋形遺跡発掘調査報告書**

漁業集落防災機能強化事業（大石地区）関連遺跡発掘調査

2014

岩手県釜石市  
(公財) 岩手県文化振興事業団







# 屋形遺跡発掘調査報告書

漁業集落防災機能強化事業（大石地区）関連遺跡発掘調査



## 序

本県には、縄文時代をはじめとする数多くの埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会资本整備が必要となります。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災による津波被害を受けて、復興事業として実施されている釜石市大石地区漁業集落防災機能強化事業に関連して、平成 24 年度に発掘調査を行った屋形遺跡の成果をまとめたものです。

今回の調査では、縄文時代前期から晩期にかけての遺物包含層の一部を調査し、多数の縄文土器や石器などが出土いたしました。出土品の分析結果から、この地が縄文時代の人達に長く利用され続けていたことが判明しております。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県釜石市役所、釜石市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 26 年 3 月

公益財團法人 岩手県文化振興事業団  
理 事 長 池 田 克 典

## 例　　言

- 1 本書は、岩手県釜石市唐丹町字屋形 23 番地 11 ほかに所在する屋形遺跡発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、大石地区漁業集落防災機能強化事業に伴う緊急事前調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導と調整のもとに、釜石市の委託を受け、公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成 24 年度に実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に示される本遺跡の遺跡番号は NG03-0060、調査略号は YKT-12 である。
- 4 野外調査期間、調査面積、調査担当者は以下の通りである。

平成 24 年 10 月 9 日～11 月 28 日　調査面積 700m<sup>2</sup>  
　　金子昭彦　高木　晃　福島正和　野中裕貴
- 5 室内整理期間、担当者は以下の通りである。

平成 24 年 11 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日　　野中裕貴
- 6 発掘調査における基準点測量は（株）スカイ測量設計に委託した。
- 7 石器類の石質鑑定は花崗岩研究会に依頼した。
- 8 遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は写真撮影技師中島久雄が担当した。
- 9 本書の執筆は福島の協力を得て、第Ⅱ章を野中、これ以外を高木が担当した。
- 10 野外調査、室内整理にあたり次の機関、個人の御協力、御指導をいただいた（順不同・敬称略）。

釜石市教育委員会　近隣住民の方々  
佐藤浩彦・森一欽・高橋岳・加藤幹樹（釜石市教育委員会）  
畠山一信（大石地区自治会長）
- 11 これまでに、調査成果の一部を現地公開資料、調査略報等に公表しているが本書の記載内容を正式なものとする。
- 12 本遺跡の出土遺物、記録類は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 凡　　例

- 1 掘図の縮尺は各図毎にスケールを付した。
- 2 土層の記載には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 3 遺構図等の方位は真北を表示している。
- 4 遺構図中で記載した座標値は世界測地系に基づく。
- 5 本書では国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「平田・小白浜」、5 万分の 1 地形図「釜石」を使用した。
- 6 遺構・遺物図については必要に応じ各図に凡例を示した。
- 7 遺物写真は不定縮尺である。

## 目 次

I 調査経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置・立地	5
2 遺跡周辺の地形・地質環境	5
3 歴史的環境	6
III 調査と整理の方法	
1 野外調査	8
2 室内整理	8
IV 調査内容	
1 概要	10
2 遺構	10
(1) 壺穴住居跡	10
(2) 柱穴状小土坑	10
(3) 遺物包含層	10
3 出土遺物	16
(1) 縄文土器・弥生土器・土師器	16
(2) 土製品	21
(3) 石器	21
V 総括	
1 縄文時代前期前葉～中葉の土器	53
2 屋形遺跡の性格（予察）	54
報告書妙録	77

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	3	第17図 出土遺物 (10)	32
第2図 調査対象範囲	4	第18図 出土遺物 (11)	33
第3図 周辺の遺跡	7	第19図 出土遺物 (12)	34
第4図 トレンチ位置図	11	第20図 出土遺物 (13)	35
第5図 トレンチ断面図	12	第21図 出土遺物 (14)	36
第6図 層序模式図	13	第22図 出土遺物 (15)	37
第7図 終了状況・検出遺構	15	第23図 出土遺物 (16)	38
第8図 出土遺物 (1)	23	第24図 出土遺物 (17)	39
第9図 出土遺物 (2)	24	第25図 出土遺物 (18)	40
第10図 出土遺物 (3)	25	第26図 出土遺物 (19)	41
第11図 出土遺物 (4)	26	第27図 出土遺物 (20)	42
第12図 出土遺物 (5)	27	第28図 縄文前期前半土器の属性	53
第13図 出土遺物 (6)	28	第29図 出土土器集成 (1)	56
第14図 出土遺物 (7)	29	第30図 出土土器集成 (2)	57
第15図 出土遺物 (8)	30	第31図 出土土器集成 (3)	58
第16図 出土遺物 (9)	31		

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	7	第5表 土器観察表	43
第2表 トレンチ別出土土器重量	14	第6表 土製品観察表	51
第3表 層位別土器出土傾向	17	第7表 石器観察表	52
第4表 トレンチ別土器出土傾向	17		

## 写真図版目次

写真図版1 調査区全景	61	写真図版 9 出土遺物 (5)	69
写真図版2 トレンチ断面 (1)	62	写真図版 10 出土遺物 (6)	70
写真図版3 トレンチ断面 (2)	63	写真図版 11 出土遺物 (7)	71
写真図版4 柱穴状土坑、検出・終了状況	64	写真図版 12 出土遺物 (8)	72
写真図版5 出土遺物 (1)	65	写真図版 13 出土遺物 (9)	73
写真図版6 出土遺物 (2)	66	写真図版 14 出土遺物 (10)	74
写真図版7 出土遺物 (3)	67	写真図版 15 出土遺物 (11)	75
写真図版8 出土遺物 (4)	68	写真図版 16 出土遺物 (12)	76

## I 調査経緯

### 1 調査に至る経過

屋形遺跡は、「漁業集落防災機能強化事業」による漁業集落道の整備により、唐丹35号線を改良することに伴い、その事業内に存在することから発掘調査を実施すこととなったものである。

唐丹35号線は、釜石市南東部に位置する大石集落の集落内に位置し、集落と漁港を結ぶ路線であり、その機能は主要路線として大石集落と漁港を結ぶ唐丹36号線の代替路線である。唐丹36号線は無堤区間でもあり、発災時に早急に避難行動が取れるよう、唐丹35号線の改良事業を実施するものである。

当該事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、釜石市復興推進本部都市整備推進室から平成24年5月17日付釜石市教発第10号「漁業集落防災機能強化事業における埋蔵文化財の試掘確認調査について（依頼）」により釜石市教育委員会に対して試掘調査の依頼を行なった。

依頼を受けた市教育委員会は平成24年6月22日に試掘調査を実施し、工事に着手するには屋形遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成24年7月3日付釜石市教発第130号「漁業集落防災機能強化事業に係る埋蔵文化財試掘調査について（回答）」により回答した。

岩手県においては市町村主体の開発に関する埋蔵文化財調査は、市町村教育委員会が担当することとなっているが、復興関連調査の増大と調査員不足により、市教育委員会では対応が困難なため、岩手県教育委員会及び市教育委員会と協議し、調整を受けて平成24年8月24日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（釜石市復興推進本部）

### 2 調査経過

平成24年8月20日に行われた生涯学習文化課、釜石市復興推進本部、埋蔵文化財センターによる協議の場で、当初の調査対象面積約6,400m<sup>2</sup>が示された。しかし、前述の試掘調査結果、及び過去の表探遺物量から見て縄文時代の遺構・遺物密度が多大と予想されること、また用地買収、立木伐採等の条件整備が完了していないことにより、当面の調査着手区域を限定せざるを得なかった。平成24年度は北東部の斜面下部（No.18～22センター杭区間）及び、斜面上部に伐採用の重機進入路を設けるための削平が不可避であることによる最小限の削平対象部分を含めた、合計2,000m<sup>2</sup>を対象として着手することとなった。

実際の野外調査作業は上記契約の元に平成24年10月9日に機材を搬入して開始した。斜面下部は現代の水田造成により原地形と遺物包含層の広がりがつかめない状況にあったため、まず人力による試掘トレッチを16箇所設定し全体の把握を試みた。その結果、東側の沢に近い部分（以下、第2図の区域①）は造成による削平が下部まで及び盛土が厚く残存する。一方、西側の斜面上部（以下、区域②）では表土下位に最大層厚2mを超す遺物包含層が残存している状態が認められた。従って、平成24年度の調査手順としては区域①の調査終了を優先し、区域②は包含層の全体状況把握を行うこととした。

区域①については盛土を重機で除去した所、遺物包含層の残存がほとんど見られず地山面での検出

遺構も柱穴状小土坑3基のみであったため、この精査を終えて終了区域とした。区域②については盛土を重機、及び人力で掘削除去し、遺物包含層の上面を露出させた段階で中断し包含層残存範囲の把握を行っている。No 18～20センター杭の間については、試掘トレンチ5箇所（T 12～16）により斜面下部から遺物包含層が広がる状況を確認し、いずれの地点も現地表より1m以上の掘削が必要と見込まれるため、今年度の着手は見送らざるを得なかった。斜面上部の重機進入路部分については、3箇所のトレンチを設定し掘り下げた結果、遺構遺物の残存は確認されていない。なお、10月25日に現場担当者が高木から金子に交代、11月16日に同じく金子から福島に交代している。

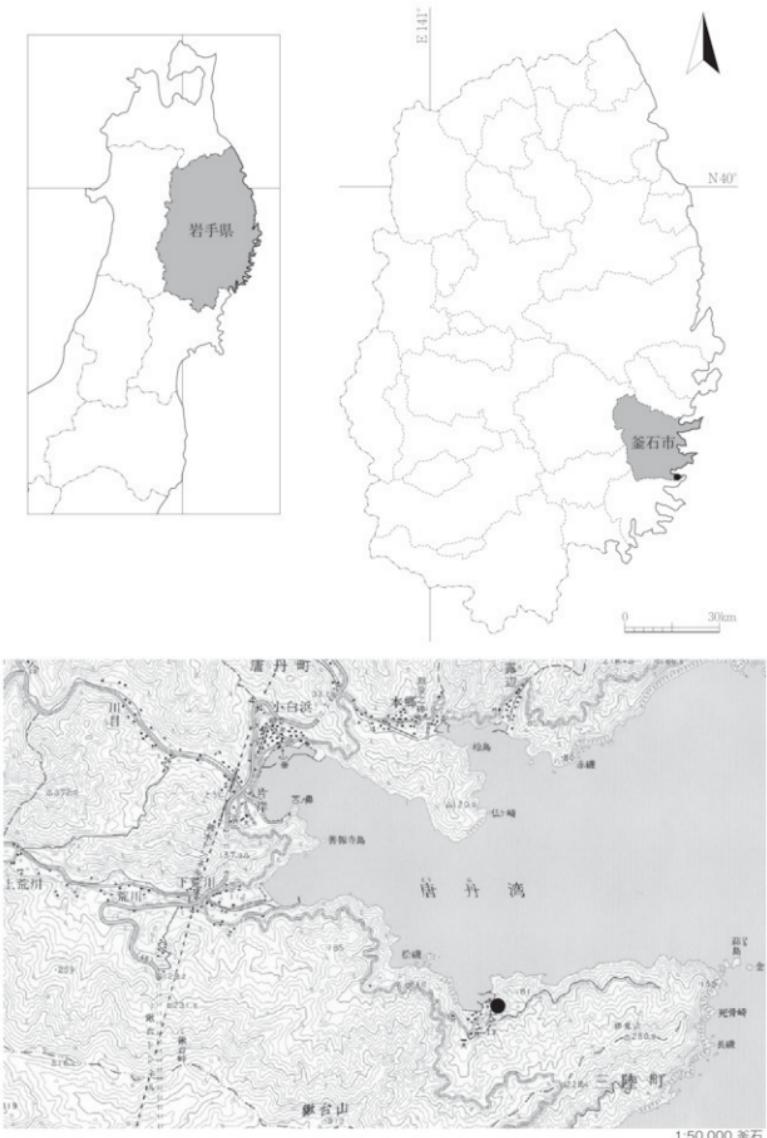
10月29日には県教育委員会生涯学習文化課担当者が来探し、遺物包含層の残存が予想以上に良好であり全体の調査期間の拡大が予想されること、また包含層が急斜面に分布し安全面を配慮した調査工法が必要となる状況を確認し、今後の調査方針について協議の場を設けることとした。

11月12日に岩手県教育委員会生涯学習文化課、釜石市復興推進本部、釜石市教育委員会、埋蔵文化財センターの4者が現地で協議を行った。埋蔵文化財センターからは、斜面部の遺物包含層に加え未着手の台地平坦部において相当量の遺構密度が想定される旨の報告、市教育委員会からは台地平坦部において実施した試掘調査で住居跡等が検出されている旨の説明、市復興推進本部からは工事計画の説明がなされた。協議の結果、当初の想定以上の調査期間、予算が必要となる状況から工事設計変更の検討がなされることとなった。また今年度調査区域については確実に終了が見込まれる緩斜面部分の700mを優先して実施することとなった。

この間、11月6日に沿岸一帯が豪雨となった影響で、屋形遺跡調査区では排土置き場から泥水が道路、海面に流出し、近隣住民からの苦情を受ける事態が発生した。応急処置として水路と沈殿池を設置し、作業休止日の11月10日（土）、11日（日）にかけて泥水監視と水路補修を行っている。

11月22日に今年度調査区域の調査終了確認が行われ、調査終了面積は上記の区域①の700m<sup>2</sup>、未了区域は1,300m<sup>2</sup>と確定、11月29日に機材を撤収した。

平成24年度調査未了となった区域に係る取り扱いについては、平成25年2月4日に行われた岩手県教育委員会生涯学習文化課、釜石市復興推進本部、釜石市教育委員会、埋蔵文化財センターの4者による協議において、釜石市が発掘調査を行い埋蔵文化財センターは調査事業を受託しないという方向で調整が進められることとなった。これによって平成24年度内に実施した調査内容については、平成25年3月31日までに室内整理作業を完了し、平成25年度に発掘調査報告書として印刷刊行されることとなった。



第1図 遺跡位置図



第2図 調査対象範囲

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置・立地

屋形遺跡の所在する釜石市は、岩手県沿岸南東部に位置する。東西約30km、南北約32km、総面積約441.4km<sup>2</sup>の市域を有し、平成24年現在の人口は約3万7千人である。大船渡市、遠野市、住田町、大槌町の2市2町と隣接する。幕末期に盛岡藩士の大島高任が日本で初めて西洋式高炉をこの地に建造した近代製鉄発祥の地であり、古くから「鉄の町」として栄えてきた。大島が建設を手がけた橋野高炉跡は幕末から明治にかけての日本近代化を語る上で重要な産業遺跡であり、「九州・山口の近代化産業遺跡群」の構成資産の一つとして周辺の製鉄遺跡と共にユネスコ世界遺産登録を目指している。産業都市であるが故に、太平洋戦争終戦間際には製鉄所を目標とした連合国軍艦隊による二度の艦砲射撃を受け、街が焦土と化した。加えて、現在に至るまで巨大な津波による被害に幾度も見舞われている。平成23年3月11日の東日本大震災による津波でも壊滅的な被害を被ったが、現在は復興に向かたまちづくりが進められている。主要な産業は鉄鋼業や水産業などであるが、近年では鉄鋼業から機械製造業へと産業の中心が移行しつつある。

本遺跡は釜石市南部の唐丹町字屋形に所在し、大石地域交流センターの北東約600m、大石漁港南岸に位置する。遺跡が立地するのは唐丹湾へと注ぐ小さな沢に沿った西側の斜面から台地上にかけての一帯と把握されている（釜石市教育委員会2007）。標高は約5～30mであり、遺跡の中でも高低差が見られる。台地上は宅地と畠地、斜面は階段状に造成された水田と畠地、植林された杉林として利用されている。

屋形遺跡は地元では古くから知られていた遺跡で、付近には遺跡に関する碑文も建立されている。これまで発掘調査こそ行われてこなかったが、近隣の大石小学校（現在は閉校）児童や住民によって多量の遺物が採集されている。内容は縄文時代前期から晩期に至るまでの多量の土器や石器をはじめ、板状土偶、鯨骨製の小刀や石製耳飾などバラエティーに富む。縄文時代以外では弥生時代前期～中期にかけての土器片、古代の土師器、羽口や鉄滓、中世～近世にかけての陶磁器類なども含まれる。これら的一部は日下（2001）、森（2007）によってその内容が公表されている。個人蔵の資料以外は現在では釜石市教育委員会が保管している。また、2006年に釜石市教育委員会によって実施された市内遺跡分布調査の際にも、縄文、弥生、古代の遺物が採集されている（釜石市教育委員会2007）。

### 2 遺跡周辺の地形・地質環境

釜石市は北上山地東部に位置し、太平洋を臨んだ海岸沿いには典型的なリアス式海岸が広がる。太平洋に突き出る半島により北から大槌湾、両石湾、釜石湾、唐丹湾の4つの湾が形成されている。唐丹地区は唐丹湾に面し、地区西側は北上山地の一部となっている。主要河川は北から大曾根川、片岸川、熊野川があり、周辺の小河川を集めながら山間を縫うようにしていずれも唐丹湾に注ぐ。河川は山地を浸食する過程で蛇行を繰り返し、流域沿いに狭小な谷底平野や扇状地を形成している。熊野川においては谷底平野の両岸に扇状地や砂礫段丘が点在するが、地形区分上では山地のみとなっている。

主な山地は、北東部の鳩ヶ峰(944m)から松倉山(616m)、蘇倉山(570m)、坂木山(474m)へと

連なる松倉山山地と、南部の荒金山(767 m)、鉢台山(620 m)、物見山(281 m)を含む荒金山山地、西部に三陸沿岸最高峰の五葉山(1,341 m)を中心とした五葉山山地に区分される。山地の大部分は中起伏(起伏量 400 m ~ 200 m)に分類され、大起伏(起伏量 400 m 以上)は地区西部の五葉山山地周辺のみである。小起伏(起伏量 200 m 未満)に分類される橋ノ木平は、牧草地として利用されている。なお、唐丹地区においては橋ノ木平から荒金山にかけて小規模な崖錐が多く分布する。

気候は四季を通じて比較的温暖な太平洋岸式気候を示し、年平均気温は 11℃ 台である。年間降水量は 1,600 ~ 2,000mm 程で梅雨と台風の時期に多いものの、冬季は山間部を除いて目立った降雪はあまり見られない。初夏を中心とした時期には“やませ”的影響を強く受け、冷夏となることもある。

### 3 歴史的環境

釜石市内には多数の遺跡が立地しているが、縄文時代に属する遺跡が他の時代と比べて多数を占める。またその大半が海岸線付近の小高い丘陵地と山間の河川沿いに立地していることが確認できる。本遺跡も縄文時代が主体であり、海岸線付近の台地上に立地しているという点からみてもその例外ではない。

特に唐丹湾南岸の遺跡分布状況を見ると（第3図）、湾奥から平林遺跡（15）、鉢台沢遺跡（16）、青島遺跡（17）、大石遺跡（18）、屋形遺跡、ヨシサリ遺跡（19）、二又沢遺跡（20）、明待場遺跡（21）と、一定間隔で連なる分布を見せ、いずれも小規模な入り江の背後にある台地上や緩傾斜地等に立地する点が共通する。急傾斜地が多く居住適地が限られることと、海浜、または海そのものの利用が遺跡立地の条件と結びついているものと思われる。

縄文時代の遺跡を時期別に概観すると、現在に至るまで縄文時代草創期以前に該当する遺跡は発見されていないものの、早期以降の各時期の遺跡が見つかっている。特に前期・中期を主体とする遺跡が多い。海岸線付近には貝塚も分布する。屋形遺跡と同じ唐丹地区に立地する小白浜遺跡では早期後半から前期前半にかけての資料がまとまって出土しているほか、それ以降の縄文時代各時期、弥生時代、近世の陶磁器などが見られる。また、堅穴状構造や土坑なども検出されている。

弥生時代の遺跡に関しては縄文時代と対照的に数が少なく、出土量も僅少である。古代の遺跡も数は少ないが、多量の土器類や須恵器が出土するケースがある。縄文時代の遺跡と複合している遺跡もあり、立地状況も縄文時代とやや似通ったものがみられる。

中世城館は河川に向かって張り出した尾根上や海岸線に面した丘陵上などに分布している。

近世には製鉄関連遺跡や塙跡などが分布する。ただし鉄滓や羽口等製鉄関連遺物が採集されるものの、時期の特定が難しい遺跡が多い。また江戸時代には盛岡藩と仙台藩の境界が唐丹湾におかれ、奥羽山脈まで続く境界塙が築かれた。唐丹と平田の間にある石塙峠はその境界上に位置しており、仙台藩側の峠にある唐丹村本郷では境目番所が置かれた。

唐丹地区での歴史上著名な人物の行跡としては、享和元（1801）年に伊能忠敬が日本列島測地の際に唐丹湾岸を測量し夜間天体観測を行った。これを記念して 13 年後の文化十一（1814）年に地元の天文学者葛西昌丕によって建立されたのが測量之碑と星座石である。星座石には円と黄道十二星座が刻まれ、円の内側には「北極出地三十九度十二分」と緯度観測結果が記される。これは現在観測される緯度と等しく当時の測量技術の高さがうかがえる。



第3図 周辺の遺跡

2万5千分の1地形図「平田・小白浜」を使用  
縮尺約1:40,000

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡コード	種別	時代	所在地	備考
1	小白浜	MG92-0133	集落跡	縄文・弥生・近世	磐丹町字小白浜	磐石市教委 H16発掘調査
2	本郷御番所跡	MG92-0333	番所跡	近世	磐丹町字大曾根	新規
3	大曾根	MG92-0259	散布地	縄文	磐丹町字大曾根	本郷より名称変更
4	桙崎	MG92-0265	散布地	縄文	磐丹町字桙崎	
5	泊頭	MG92-0251	城館跡	中世	磐丹町字泊頭・字小白浜	
6	慈西善右衛門宅跡	MG92-0361	屋敷跡		磐丹町字慈西	
7	清瀬場	MG92-1205	散布地	縄文	磐丹町字岸・字小白浜	
8	千葉船	MG92-1209	城館跡	中世	磐丹町字千葉・字小白浜	
9	シラ崎	MG92-1221	散布地	縄文	磐丹町字シラ崎	遺跡コード変更
10	合戰亭	MG92-1330	屋敷跡	近世	磐丹町字合戰亭	新規
11	白崎船	MG92-1332	城館跡	中世	磐丹町字白崎	新規
12	仏ヶ崎	MG92-1364	貝塚	縄文	磐丹町字仏ヶ崎	
13	仙城	MG92-0191	城館跡	中世	磐丹町字岸・字小白浜	
14	片岸一里塚跡	MG92-1152	散布地	近世	磐丹町字片岸	新規・隣域
15	平林	MG92-2067	散布地	縄文	磐丹町字上荒川	下荒川1・2を統合し、名称変更
16	興台沢	MG92-2170	散布地	縄文	磐丹町字下荒川	下荒川3より名称変更
17	青島	NG02-0276	散布地	縄文・弥生	磐丹町字向	
18	大石	NG02-1305	散布地	縄文	磐丹町字大石・字向	磐石市教委H13・H14年度試掘調査
19	ヨシザリ	NG03-0063	散布地	縄文・古代	磐丹町字ヨシザリ	大石1より名称変更
20	二又沢	NG03-0063	散布地	縄文	磐丹町字二又	大石2より名称変更
21	明持場	NG03-0149	散布地	縄文	磐丹町字明持	大石3より名称変更
22	物見山見張所	NG03-0196	見張所	近世	磐丹町字見張	

### III 調査と整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 基準点測量

調査区内に3級基準点2点（3-No1、3-No2）を設置し、第10系釜石電子基準点を使用しGPS測量により座標値を求めた。

調査区内に設置した基準点の世界測地系座標値は以下の通りである。

3級基準点 3-No1 X = -78122.166 Y = 49403.769

3-No2 X = -78100.053 Y = 49575.949

4級基準点 基1 X = -78130.000 Y = 49420.000

基2 X = -78130.000 Y = 49500.000

##### (2) トレンチの設定

調査着手にあたってトレンチを19本設定し、下位層の状況把握を行った。その結果、斜面南西側を中心に縄文時代遺物包含層の良好な広がりを検出しており、層位別に遺物を取り上げ、土層断面の観察記録を行った。

##### (3) 遺構精査及び遺物の取り上げ

遺物包含層以外には堅穴住居跡1棟、小規模な柱穴状ピット3基を検出した。住居跡は南東側が搅乱で破壊されており、北西側約2分の1について次年度に精査対象とすることとし、精査を中断している。ピットは半裁によって埋土を確認しながら掘り下げた。

##### (4) 実測記録及び写真撮影

トレンチの位置と検出遺構の平面実測には株式会社CUBIC製「遺構君CUBIC2012」を使用した。断面図は通常の手作業による実測を行った。

写真撮影は以下の機材を使用した。

中判(645判白黒フィルム) 1台 使用機材 MAMIYA 645

35mm判デジタル一眼レフカメラ 1台 使用機材 Canon EOS 5D

#### 2 室内整理

##### (1) 遺構記録の整理

現地において作成した遺構平面図（第1原図）は必要に応じて「遺構君CUBIC2011」上で合成等の編集作業を行い、第2原図を作成した。遺構写真是デジタルカメラ撮影データを使用しIllustrator CS4上で図版編集を行った。

## （2）遺物の整理

出土遺物は野外作業の雨天時および室内作業に入つてから水洗し、種別の仕分けを行つた。主体を占めるトレンチ出土の縄文土器については、出土地点・層位別に重量を測定した後に注記、接合・復元作業を行つてゐる。その後、時期別に分類を行い、各トレンチの出土傾向を反映するように掲載資料を選抜した。石器・土製品は全点を登録しそのなかから掲載資料を選抜した。掲載資料は実測、手書きトレースを経て図版を作成した。

遺物写真是デジタル一眼レフカメラ (Canon EOS 1D) を使用して撮影し、Adobe 社 Photoshop CS4 を用いてコントラスト等の調整を行つた後に Illustrator CS4 上で図版データを作製した。石器石材鑑定は花崗岩研究会に委託し全点を対象に行つた。全て肉眼による同定で岩石名称、産地、年代が特定できるものを記載している。

## （3）室内整理経過

平成 23 年 11 月 1 日から開始し、11 月上旬までに遺物水洗を終了、仕分け登録と平行して土器接合・復元を 12 月上旬まで行う。この時点で掲載遺物の選抜を行い各種遺物合わせて合計 317 点を掲載遺物として選抜した。12 月下旬から 2 月中旬にかけて遺物実測、トレースを行い 3 月末までに遺物図版、遺物写真図版を完成した。遺構記録に関しては上記作業と平行し遺構図編集、図版作成、遺構写真図版作成を主に PC 上で行い、同様に 3 月末までに完成した。

## IV 調査内容

### 1 概要

第Ⅰ章第2節に記載した通り、今回の調査は当初は海岸線から遺跡南側の台地上に至るまでの斜面地を対象としたが、実質的には斜面下部の700mの調査となった。造成による搅乱の影響が小さく残存状況が良いと思われる遺物包含層については表土・盛土を除去し全体の露出を進めた。包含層下位まで搅乱を受けている部分は地山面まで掘り下げた後に、遺構検出・精査作業を行った。

精査対象とした遺構は遺物包含層以外には柱穴状小土坑3基のみだが、他に堅穴住居跡の可能性ある地点を検出しており、以下記載する。

遺物包含層は斜面下部から中央にかけて西寄りを中心に分布する状況である。今回はトレンチによる確認にとどまるが、概ね縄文時代前期初頭～中期前葉、中期後葉～後期前葉、晩期末～弥生時代初頭を主要時期として、複数層に細分可能な状況を把握している。

### 2 遺構

#### (1) 堅穴住居跡（第7図）

調査区北部の平坦地西側（区域②内）に位置する。当初は遺構の存在を確認できないまま、重機により南東側の表土・盛土の掘削を進め、造成によって生じた遺物包含層上面の段差を露出させた。段差の高低差は平均50cm程で、南東側が低く北西側が高い。段差断面をクリーニングしたところ、堅穴住居跡の可能性がある包含層境界の凹凸を検出した。上部の包含層Ⅱ層にあたる黒褐色土が、下位のⅢ層暗褐色土中に鍋底状に入り込む状態であり、堅穴住居跡が造成によって半裁された可能性があるものと判断した。規模はおよそ4～5m程度である。残存部分は今次調査で着手せず次年度に改めて精査する予定としていたため、計測他の記録を欠き正確な位置は把握していない。第7図に示した位置、形状は略図である。

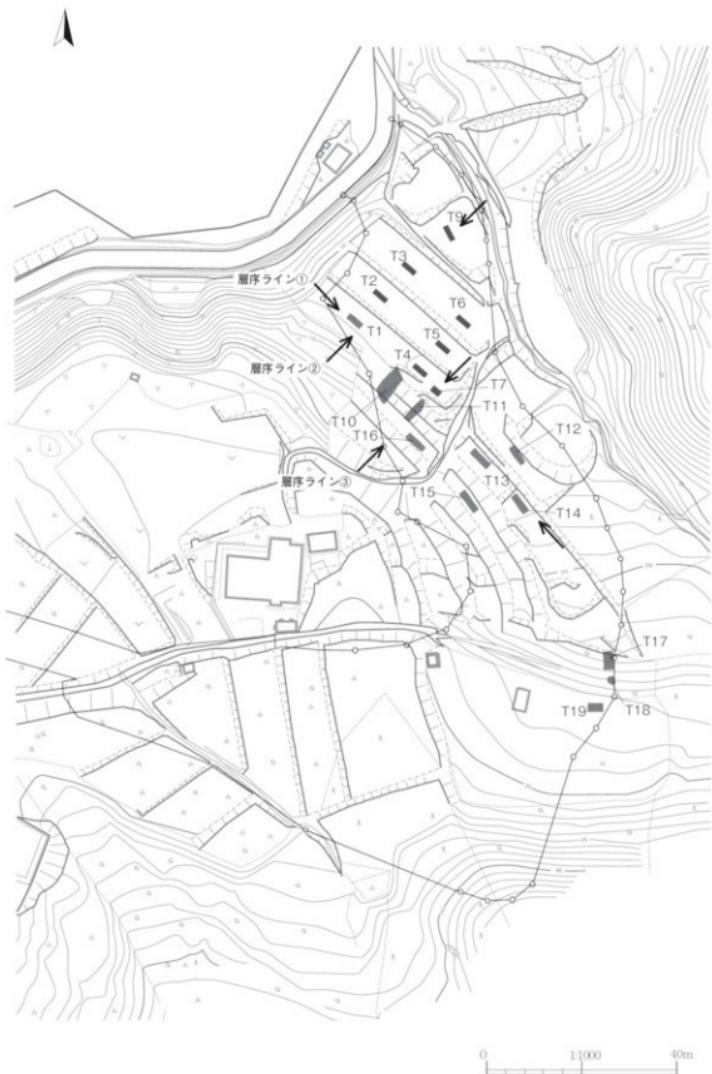
#### (2) 柱穴状小土坑（第7図 写真図版4）

区域②中央部の地山粘土層面で3基の柱穴状小土坑を検出した。P1とP2・3が3m弱の間隔を開けて隣接する。P2とP3は重複するが同時に完掘したため新旧関係は把握していない。3基の規模はほぼ等しく直径、深さ共に約50cm程である。遺物の出土はないが、埋土には遺物包含層と同相の黒褐色土が堆積していることから縄文時代の遺構と考えられる。柱痕は確認できなかったため柱穴とは断定し難い。

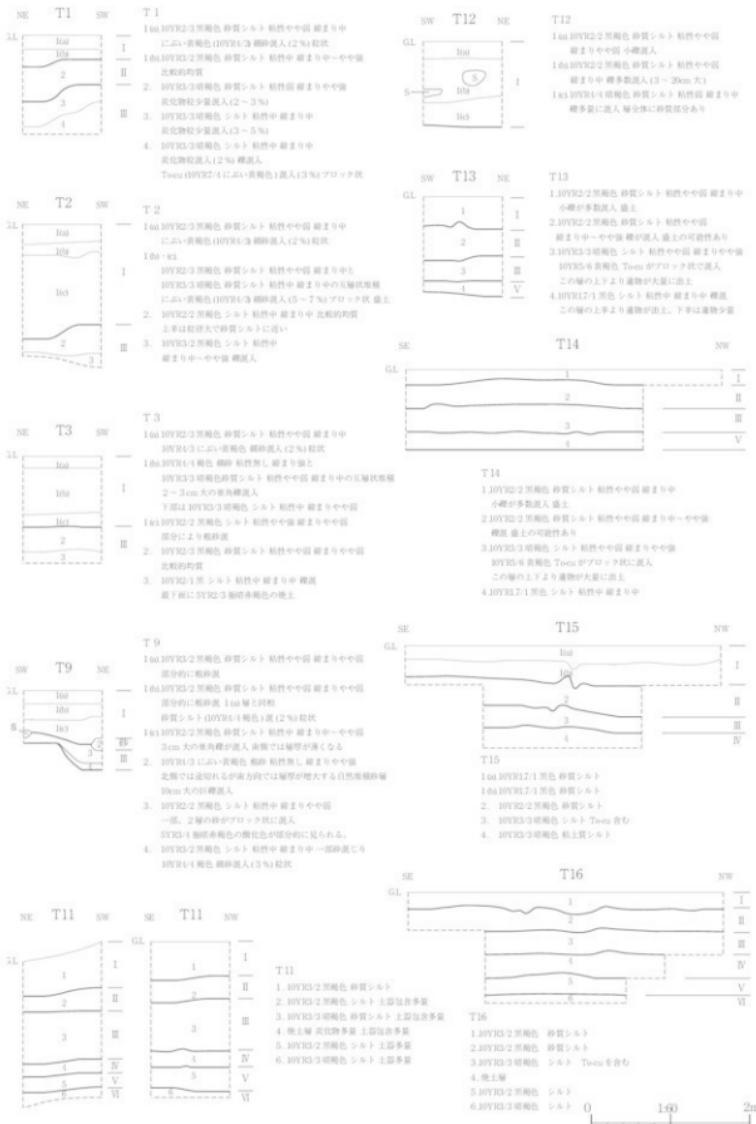
#### (3) 遺物包含層（第4～7図 写真図版2・3）

##### a 分布

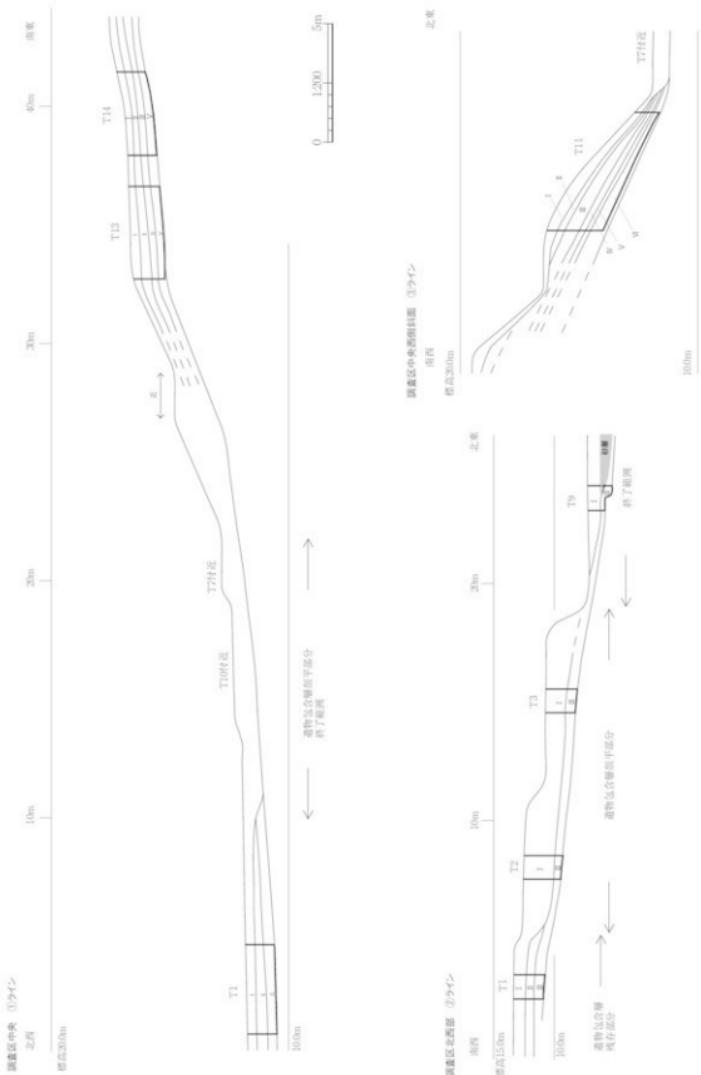
調査区北部から中央部にかけての斜面上部を中心に、縄文時代早期末～弥生時代前期に至るまでの各時期の土器が出土する遺物包含層が分布する。トレンチT1～T16で包含層の分布と層位の確認



第4図 トレンチ位置図



第5図 トレーン断面図



第6図 層序模式図

を行った。各トレチ出土土器量を基準とすると、第2表に見られるようにT 1・2・10・11・13・14・15・16については概ね10kgを超す土器類の出土があることから、包含層の概略範囲はこれらのトレチを中心としたエリアと想定される（第7図）。T 4・7・12を結ぶライン附近には造成による段差が見られ、ここから北東側は造成により下部まで削平を受けた結果、本来の包含層分布が途切れてしまったものと考えられる。またT 14・15以南の斜面上部区域での包含層範囲は調査が及んでいないため明確ではない。

#### b 層序

層位は各トレチで個別に分層し記録したものを、全体の特徴をもとに基本層序I～VI層に統合している。ただし、トレチ同士を繋ぐ連続した断面は設定していないため、地点により異なる土層を同一層と捉えている可能性は否めない。各層の内容は以下の通り。

< I 層 > 造成盛土及び表土である。北西側のT 1～3では水田造成の盛土となっており部分的に1mを超す層厚である。遺物出土は多い。中央東側のT 9・12では角礫が多く含む砂層主体であるが、これも造成盛土と見られる。南西側のT 13～16では畑地の表土にあたる黒褐色土をI層とした。

< II 層 > 黒褐色砂質シルト主体の土層ではほぼ全域に見られる。ただしT 14では角礫の混入が目立ち、造成盛土の下部を誤認している可能性がある。またT 15では層相は同等だが、第4節出土遺物で記載するように縄文晩期末～弥生初頭の土器が多量に含まれており、他地点のII層より上位に分布する包含層を一括して捉えている恐れがある。

< III 層 > 黒褐色～暗褐色シルト層である。これもほぼ全域の分布を確認した。T 1・13・14・15・16の斜面上方に位置するトレチでは、本層内部に十和田中振テフラ（以下、To-cu）起源と見られる黄褐色の火山灰ブロックが混入する。いずれも層中に不規則な形状で介在する。

< IV 層 > T 11・15・16の斜面上部に分布する。To-cu を含むIII層下位に焼土ブロックを含む暗褐色シルト層として認識した土層である。特にT 11・16では廃棄されたと見られる焼土ブロックが主体となっており、一定範囲に分布する状況と見られる。

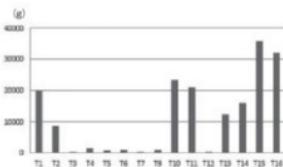
< V 層 > T 11・13・14・16の斜面上部に分布する。III層下位で最も暗色になる部分を本層と捉えた。地点により黒色～黒褐色シルトの変化がある。

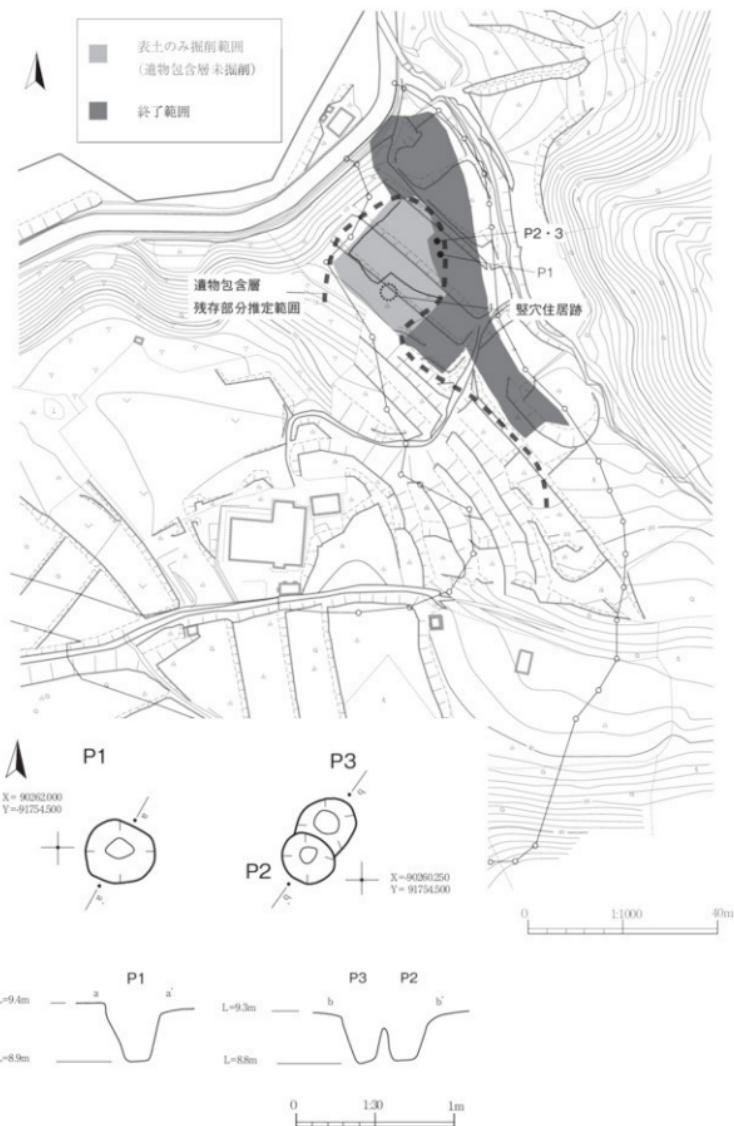
< VI 層 > T 11・16の最下部に分布する暗褐色粘土質シルト層。本層下位は無遺物の褐色粘土層に漸変する。

第2表 トレチ別出土土器重量

トレチ名	T 1	T 2	T 3	T 4	T 5	T 6	T 7	T 9
土器重量(g)	19,887	8,723	246	1,368	771	997	16	993
トレチ名	T 10	T 11	T 12	T 13	T 14	T 15	T 16	全休
土器重量(g)	23,306	21,001	323	12,432	16,094	35,721	31,989	173,776

\*トレチ周辺や耕土から出土したもの、及びトレチ以外の表探資料は集計から除く





### 3 出土遺物

土器の総量は重量で 173.7kg、40 L コンテナで 16 箱である。破片数は集計していない。うち 278 点を掲載遺物として選抜した。土製品は土偶 1 点、円盤状土製品 2 点を登録、掲載。石器は剥片を含めて 237 点が出土、うち 36 点を掲載遺物として選抜した。

#### (1) 縄文土器・弥生土器・土師器

##### a 出土傾向

各トレンチ出土土器について層位的な出土傾向を把握するために、接合作業を通じて時期別に分類可能な個体の概略破片量を集計した。集計にあたっては詳細な破片数のカウントは省略し、多量・中量・少量の 3 段階区分に単純化している。層位別に整列したのが第 3 表、同内容をトレンチ別に整列したのが第 4 表である。

以下、各層別に土器出土傾向を記載する。

＜I 層＞ 造成による包含層の搅乱で生じた盛土出土土器を一括しており、地点によりばらつきはあるものの概ね縄文前期初頭～前葉、前期後葉～中期初頭、晩期末～弥生時代初頭が主体となる。これは今回の全体的な出土割合を反映している状況であり、搅乱が包含層下部まで及んでいることを示すと考えられる。

＜II 層＞ 概ね縄文前期後葉～中期初頭が主体となるが、T 14・15 では中期後葉～後期前葉、晩期末～弥生初頭が一定割合を占める。両トレンチは斜面の南側に位置しており、土層断面では認識不能であった同時期包含層の存在をうかがわせる。また T 14・15 より若干北側に位置する T 13・16 では前期初頭～中葉も多い。II 層は To-cu ブロック混入のⅢ層より上位と捉えているが、遺物取り上げに際して下層帰属遺物が混在している可能性がある。

＜III 層＞ 北側の斜面下方にあたる T 1・10 では前期後葉～中期初頭の比率が高いものの、全体としては縄文前期初頭～大木 3 式段階までを主体とする。ただし本層でも T 13・15・16 において晩期末～弥生初頭土器が含まれており、当該地点の包含層堆積が単純な水平層位ではないことを示すと考えられる。

＜IV 層＞ 主な集計対象となる T 15・16 では縄文前期初頭～中葉が多数であるが、Ⅲ層同様に両トレンチとも中期初頭まで、更に T 15 では縄文後期～晩期末破片を含む。

＜V 層＞ 集計対象となる T 16 では縄文前期初頭～中葉が主体である。

上記をまとめると、全体的な状況は

II 層：前期後葉～中期初頭（大木 6・7 a 式段階）

III 層：前期中葉（大木 2 a・2 b・3 式段階）

IV・V 層：前期初頭～中葉（大木 1・2 a 式段階）

と把握可能と見られる。ただし斜面に立地する包含層であり、部分的なトレンチ断面で観察される以上に複雑な堆積過程を経ている可能性があることから、詳細についてはより広範囲な調査を元に検討する必要がある。

##### b 土器の特徴

図版掲載はトレンチ番号順、層位上層から下層の順に配列している。個々の特徴については第 5 表



土器観察表に記載した。表中では下記項目について記述を単純化するために段階区分を設定し、一部略称を用いている。

＜繊維＞ 胎土中の繊維混入割合を4段階に区分した。多量に含まれ、内外面に繊維痕跡の空隙が密集成しているものを「混多」。部分的に繊維痕跡が散在し、詳細な観察の結果辛うじて繊維を含む状態と判断できるものを「混少」。それらの中間にあたり、一見して繊維混入と判断できるものを「混」。全く繊維含有の痕跡が観察されないものを「無」とした。

＜胎土＞ 「粗」「中間」「緻密」の3段階に区分した。「粗」は胎土中の砂粒混入が多めで、混和材の砂粒が脱落した空隙が顯著に見られる状態、「緻密」は精選された粘土を素材としており堅致な仕上がりとなっている状態、それらの中間を「中間」とした。なお器表面に石英や長石等の砂粒が顯著に観察されるものについては別途記載した。

＜内面調整＞ 内面調整については均一にナデ・ミガキ調整が施され平滑に仕上がっている状態のものを「平滑」、粗いナデ調整仕上げで平滑でない部分が残るものを「粗」、同様に粗い仕上げで不規則な凹凸が残るものを「不規則凹凸」、ナデ調整仕上げで擦痕の方向が一定しているものを「横(擦痕)」「縦(擦痕)」、明瞭な貝殻条痕仕上げのものを「条痕」と略称した。

次に、掲載資料のうち個別の特記事項について記載する。

＜T 1 - I 層＞ №1は口縁部から胴部下半まで復元された大型の深鉢である。I層・III層出土片が接合した。頭部上半に半裁竹管押し引きによる複数の横走沈線が巡り、隆帯を挟んだ頭部下半には同一工具によると思われる鋸歯状沈線が3条施文される。胴部上半文様も同一工具の裁断面側を使用したX字基調のモチーフが展開するが単位によって構成が異なる。№4は頭部が内側に屈曲する大型の深鉢で、a・bの口縁部片の他にcの胴部上半片が含まれる。№5は立体的な突起と隆線に沿う縄文原体圧痕が施された大木8 a式の口縁部片。

＜T 1 - II 層＞ №8は肥厚する口縁突起部下に1対の円形貼付文を繋ぐ隆線が加えられる。№9はオオバコと思われる植物穗先の回転圧痕が施される。№10は折り返した口縁肥厚帯にごく細い工具による鋸歯状の沈線と刺突列点が連続する。

＜T 1 - II・III層＞ №14は口縁部肥厚する深鉢上半で、胴部地文は上部が原体横位回転、下半は縦位回転される。T 11の1層出土破片と接合する。№15は口縁部の肥厚が少なく、断面形丸い沈線による渦巻文とW字状のモチーフが組み合わされる。

＜T 1 - III層＞ №17は結節部分のみ圧痕が残る。№18はT 1とT 10から同一個体片が出土する。単節縄文を施文した上から深く鋭い平行沈線を縱走させる。№19は山形の口縁頂部に突起が付き、直下に貫通孔が開けられる。口唇に沿って結節浮線文を加え、緩く外反する口縁部全体にはX字状の文様が刺突列点で表現される。№20は単節縄文施文後に円文に沿った丸い粘土紐の隆線文が加えられる。№21の隆線は一部剥落。№23は突起頂部に沈線状の刺みが加えられる。№24の垂下する鋸歯状沈線は1本毎に引いているようである。№27の深鉢大破片は肥厚する口縁直下から全面結節付きLR縄文縦位回転。№30も同様の口縁部破片で波状頂部下に小突起が加えられる。№31は正面形状台形の突起破片。口唇内面側に緩い稜線を持つ。№32・33は植物穗先回転文。№34は外反する口縁部の大木8 b式土器。

＜T 2 - I 層＞ №37は断面形丸い口縁部が緩く波打つような状態で平坦ではない。№38は隆線剥落部分から推定して縦長の棒子状文様施文とみられる。№39は口唇部上面に円形刺突列が加えられる。№41は頭部に波状の沈線が巡り胴部地文は植物穗先回転文が施される。№43の内面には断面方形の

隆帯が口縁に沿う。No.44はV字状の隆線が突起肩から垂下し、内部に繩文原体圧痕を持つボタン状貼付文が加えられる。

<T 2 - I ~ IV層> No.47は環付末端が多段に施文された胴部破片。

<T 1 - 4周辺 - I層> No.49は単軸絡条体を斜位に回転させている。No.50は木目状撚糸文。No.52は地文單節繩文は角張る筋となっている。No.54に施される網目状撚糸文は内部に撚りの痕跡が観察できない。ビニール紐のような撚りのない原体を用いている可能性が高い。一部に刺突列点文様が加えられる。No.55はLR繩文を不規則に施文し、原体末端が解けた部分の回転圧痕が観察される。No.56は頸部鋸く屈曲し、口縁部は折り返して肥厚する。No.57は突起頂部欠損。内面側に曲がり込む立体的な突起となっている。No.58は口縁上下の押し引き沈線、口縁のV字状沈線、頸部の鋸歯状沈線共に半裁竹管の同一工具を用いているとみられる。No.59は突起下の貼付文が剥落した状態。No.65は直立する底部破片で底面に網代痕を持つ。欠損のため不正確だが上面觀精円形となる可能性がある。

<T 6周辺 - I層> No.71は網目状撚糸文を横位に回転。No.73は地文施工上から鋸歯状沈線を加える。No.75は胴部の最大径部分に三角形印刻文を持つ隆帯が一周する。No.77は非クロロ整形の小型土師器亮口縁部片。土師器片はこの1片のみ確認している。

<T 9 - 砂層> No.78は2条の縱位隆線に加えた刻みと区画内部の沈線に同一工具を使用する。

<T 10 - I ~ III層> No.80は纖維を含み口縁下の隆帯に指頭圧痕が加えられる。外面の器面調整は丁寧な仕上げで、単節LR繩文も整然と施文されている。No.81は繩文晩期以降の粗製土器片。

<T 10 - I ~ V層> No.82は外傾する口唇端部に刻みが並列し直下に繩文原体圧痕による渦巻状の文様が施される。No.83・84は環付末端繩文が多段に施文された胴部破片。No.85は上半非結束羽状繩文、下半条縱走繩文となる。No.88は斜行繩文に単軸絡条体1類が重ねられる口縁部片。No.89はRLとRRの合撚複節繩文が施文される。No.90 ~ 94は口縁部に結節回転文を多段に施す。いずれも口縁端部が短く外反する特徴がある。No.95 ~ 97はS字状連鎖沈文と隆帯、刺突列が組み合わせられる。No.98は三角形突起から刺目入隆線が垂下する破片で纖維を含む。No.100は網目状撚糸文を横位に回転する破片で、外面に顯著な黒斑が見られる。No.101は結節回転文が底面に施文された底部片。No.106の胴部には刷毛目状の条痕が施される。No.107は木目状撚糸文の上から頸部に2条の隆帯を巡らす。No.111・112は共に植物穗先の回転文だが、No.111では圧痕先端が丸くNo.112では鋭いという違いがある。No.113は大型の突起基部を持つ口縁部片。突起の形状は不明。

<T 10 - III層> No.116はLRとRL繩文により羽状繩文を菱形に構成する。No.121は4本丸組紐風の原体が回転押捺されている地文だが判然としない。

<T 11 - I層> No.122は内外面条痕の胴部破片で3片を掲載したが、他にも同一個体の小片が複数出土する。内外面共に右下がり、左下がりの斜位条痕が重ねられており部位によって新旧関係は異なる。No.123は組繩繩文が施された胴部破片。No.128・129は共に頸部に鋸歯状の貼付文が巡っている。No.125は複節繩文が施された纖維を含む口縁部片。No.128は頸部に鋸歯状の隆帯が巡るが大部分は剥落する。No.132は外反する頸部に三角形印刻文が加えられる。

<T 11 - I ~ VI層> No.135は口縁部外面と胴部にRL繩文、口縁部外面にLR繩文がそれぞれ横位回転される。No.138は非結束羽状繩文で上半RLの末端を縛った痕跡が現れている。菱形構成を取る可能性が高い。No.139は組繩繩文。No.140は矢羽根状に2本の縱走する条が繰り返している特徴からLRとRLを組み合わせた「繩の束」の回転施文と捉えられる。No.143の口縁部突起正面形状は整った三角形を呈する。単位数は不明。No.147・148は共に植物穗先回転文。

<T 13 - II層・III層> No.152は頸部に圧痕を加えた隆帯が巡り、その下位には皿状に窪む刺突文

が縦横に配列する。地文には附加条縄文が用いられる。

<T 13 - III層> №154は口縁部が一部しか残存していないが平縁とみられる。№155の突起は左右不对称。№157は逆凹字形の磨消縄文文様を持つ壺胴部破片で赤彩の痕跡が残る。弥生時代中期に比定され、今回の調査ではこの1片のみ確認している。

<T 14 - I 層> №160は折り返し肥厚口縁と頸部の沈線文に沿って縄文原体圧痕が施される。

<T 14 - II層> №162は4本丸組紐地文。№166の胴部文様は全面縄文施文上から沈線文様を加えている。№169は複数の破片から全体の文様構成を復元し難いが、緩い波状口縁から垂下する隆線と胴部上半に巡る隆帶で方形に区画される可能性が高い。隆線にはいずれも梢円形刺突文が加えられる。

<T 14 - III層> №171は口縁部に葺瓦状となる多段結節回転文が施される。№172は口縁に左右不对称の小突起を持つ。欠損のため不明瞭だが3個1単位の突起になる可能性がある。

<T 15 - I 層> №175はキャリバー型深鉢の口縁破片。隆沈線の区画内に梢円形の刺突文が充填される。№177は沈線の接続部に円形刺突文が加えられる。№178～184は変形工字文を基調とする縄文晩期末～弥生初頭の土器群。量的にはT 15からの出土が最も多い。№185～187の粗製土器がこれらに伴うものとみられる。№184は高坏脚部片。№188は小型の四脚付土器底部で、1対の脚部基部に紐通し穴と思われる貫通孔が開けられる。

<T 15 - I・II層> №189は突起頂部から円形貼付文を経て蛇行隆線が垂下する。№190は広口の壺上半破片。口縁内面に沈線文が施される。

<T 15 - II層> №192は破損しているため正確ではないが、三角形の貫通孔を伴う2個1組の山形突起と、台形の突起が繰り返し、台形突起下のややずれた位置に半円形の隆線文を持つ。№194は蛇行隆線の上面に縄文原体圧痕が押捺される。№195は貫通孔が複数開けられた装飾的な突起破片で口縁内外面に類似した沈線文が展開する。№196は浅く太い沈線による縦位区画が連続し、内部に撲糸文が充填される。№201は球胴形の壺胴部上半破片で沈線に沿って小径の刺突列が加えられる。№202～208は縄文晩期末～弥生初頭の土器群で、I層出土破片と時期的な差はないものと考えられる。

<T 15 - III層> №211は外面に縄文が施された尖底底部片。№213は底面に胴部外面と同じ原体の複節RLR縄文が回転施文される。

<T 16 - I・II層> №217は丸い粘土紐の鋸歯状隆線文が施され、加えてV字状の剥落部分が観察できる。№218は円形刺突を加えた幅広の鋸歯状貼付文を持つ口縁突起部片。№222は沈線施文後に鋸い刺突を加える。№225は口縁部内面に隆帶が巡り、その上部に小径の刺突列が施される。

<T 16 - II層> №228は口唇部に原体圧痕が施される。№231は結束羽状縄文施文後に口縁部に結節回転文が加えられている。№232は4本丸組紐原体が使用される。№233は口唇端部が顯著に角張る。№234～237はS字状連鎖沈文地文の土器。№234は口縁部隆帶の上下から対になる向きの刺突列が加えられる。№236は縦位隆線の末端に円形貼付文がつく。№237は口縁部に半裁竹管先端による刺突列が2条巡る。№238は突起頂部に上面観S字状の貼付文を持つ。№239の細い沈線は半裁竹管を使用。№243は突起頂部を欠く大波状口縁。

<T 16 - II層・III層> №244は強く外反する口縁部片で沈線は細く鋸い。

<T 16 - III層> №245は環付末端が多段に施される。№246は結束1種羽状縄文、№247は非結束羽状縄文である。№250は4本丸組紐を用いており補修孔が開けられる。№251～253は結節回転文多段施文の土器。うち№252・253は正面形状三角形の突起を持つ。№255の口縁部隆帶は、刺突列、

隆帯貼付、隆帯上の刻み、隆帯下端の刺突列という順序で施文されているようである。No.257は横位網目状撚糸文と単節繩文を多段に繰り返す。No.258底部片の底面には網目状撚糸文が施文される。

<T 16 - IV層> No.260の口唇部は内削ぎが顕著。No.263は木目状を呈しないが単軸絡条体1A類の一種とみられる。

<T 16 - V層> No.264は緩く外反する大型の深鉢上半破片で、0段3条LRと0段4条RLを用いた非結束羽状繩文が多段に施される。No.265は通常の斜行繩文もしくは撚糸文風に見えるが、条内部に亀裂が入っており連続する押し引き圧痕の可能性もある。No.267は口唇部外面側に刻みが連続する。No.270の底部片底面には結節回転文が施される。

<表探・出土地点不明> No.275の口縁部文様は円形沈線文に接して大きい剥落部分があり、何らかの貼付文様が施されていたとみられる。No.276は正面形状円形の口縁部突起両肩に小突起が2対加えられ、口唇端部が凹む。No.277は頸部で鋭く屈曲する口縁部破片で、内面の隆帯と口唇が橋状の突起で繋がれている。No.278は口縁部下から2段に肥厚し、内面側にも稜線を持つ。

## (2) 土 製 品

No.279は中空土偶の脚部。足先を欠損しているため左右の区別は判断不能である。脚部は沈線で上下を区画した中にLR繩文が施される。また腰部との接合面に凸面が観察される。精選された胎土や細い繩文原体の特徴から繩文時代晩期末～弥生時代初頭の所産と見られる。No.280・281は繩文前期土器片を利用した円盤状土製品である。

## (3) 石 器

出土石器合計237点の内訳は石鎌13点、石匙11点、楔形石器3点、不定形石器26点、使用痕ある剥片8点、磨製石斧8点、打製石斧14点、礫器13点、敲磨器類32点、石皿台石類1点、剥片108点である。出土は土器とはほぼ同じ傾向を示し、T 10(46点)・T 15(50点)・T 16(40点)の3トレンチで半数以上を占める。図版配列は器種順とし、以下に説明を記載する。

<石鎌> (No.282～285) 合計13点の出土。4点を掲載した。全体では無茎鎌が多数である。No.285・286は先端を欠損する。

<石匙> (No.286～291) 合計11点の出土。7点を掲載した。No.287は背面側右側縁の二次加工剥離に際して腹面側に打面作出の小剥離を連続させる。No.290は抉れ部にアスファルト付着。No.291は綫長素材剥片の打面とバルブが残存する。11点のうち横型石匙はNo.290の1点のみである。

<楔形石器> (No.292・293) 合計3点の出土。2点を掲載した。対向する2刃から深い剥離面が中央まで伸びており接する状態となる。縁辺は小剥離が集中し潰れた状態となっている。

<不定形石器> (No.294～299) 剥片素材で側縁に二次加工が施されるものを一括している。合計26点の出土。6点を掲載した。No.294・295は横長剥片を用いてヘラ状に整形されており側縁の片方に両面加工の刃部が作り出される。No.296は素材剥片の末端部に急角度の刃部を持つエンドスクリイバー。No.297は両面加工のやや大型の石器基部側と見られる。No.298は素材剥片の1縁辺に急角度の二次加工が連続する。No.299は石錐のような尖端が作り出されるが、回転使用に伴う痕跡は観察されない。

<使用痕ある剥片> (No.300・301) 剥片の縁辺に使用痕と見られる微細剥離痕が明瞭に認められるものを一括している。合計8点の出土。2点を掲載した。No.300・301は未加工の剥片側縁に刃こぼれと見られる微細剥離痕が連続する。

＜磨製石斧＞（No.302～304）合計8点の出土。3点を掲載した。いずれも側縁に稜線を持つ定角式である。No.302は全長が短く、基部が左右不对称である。おそらく破損品の再加工によるものであろう。No.304は刃こぼれの痕跡が連続する。

＜打製石斧＞（No.305～310）短冊形、撥形を呈し敲打剥離によって短冊形、撥形に整形されている。合計14点の出土。6点を掲載した。片面に素材礫面を残し、反対面に二次加工の敲打剥離が中央まで及んでいるといった形態的な共通性を有している。出土地点はT 10-I～V層に7点、T 16-IV層に4点と偏在する。以下、全体的な特徴を記載する。

計測値は全長9～11cm、最大幅4～6cm程度で、一般的な打製石斧との違いはない。短辺（図の下方）を刃部とした場合には、刃角は55度～70度の範囲に収まる。

形状、加工については、「加工面」側の二次加工剥離が全ての個体において中央まで及んでおり礫面はほぼ残らない。一方、「礫面」側ではNo.305・306のように基部側縁の一部に加工が施されるもの、No.309のように一方の側縁に加工が施されるものが含まれるが、全体としては礫面が広く残る状態で共通する。側面形状はNo.305・307・309に典型的に見られるように基部側に礫面が丸くなる部分を利用し、刃部側は基本的に加工面側の剥離調整のみで刃部を作り出している。礫面側に見られる小剥離痕は使用によるものと考えられる。また、使用痕は短辺側の刃部と見られる側縁が一定程度潰れている状況が観察される。一方、器体中には着柄の痕跡は一切見られない。

石材はホルンフェルス、砂岩、はんれい岩を主として使用している。ホルンフェルス素材のものでは、表面の風化が顕著に進んでいる個体が含まれる。

＜礫器＞（No.311・312）合計13点の出土。2点を掲載した。2点とも扁平な円礫の側縁に両面からの交互剥離によってやや鋭利な刃部を作り出している。不掲載品は亜円礫や亜角礫素材も含まれ、一部分に剥離が加えられるものも含まれる。

＜敲磨器類＞（No.313～316）いわゆる凹石、磨石、敲石等、素材礫の形状を変えず使用痕が観察される礫石器類を総称した。合計32点の出土。うち4点を掲載した。No.313は円礫中央両面に敲打痕が集中し浅い凹部が形成される。No.314は断面稍円形の礫で1側縁に平坦な擦面を持つ。No.315は扁平な円礫の1側縁に敲打剥離痕が集中する。No.316は稍円形の扁平礫の末端に擦面が見られる。

＜石皿・台石類＞（No.317）1点のみの出土である。花崗岩を素材とし両面に敲打痕が散在する。ただし表面の風化が進んでいるため正確さを欠く。図化した面には一部、摩滅痕が観察できる。

＜剥片＞ 合計108点の出土。個々の詳細な観察は行っていないため正確な記載はできない。全体的な特徴としてはほぼ全てが頁岩素材で、全長2～4cm程度の小型剥片が主体である。

T1-I層



第8図 出土遺物(1)

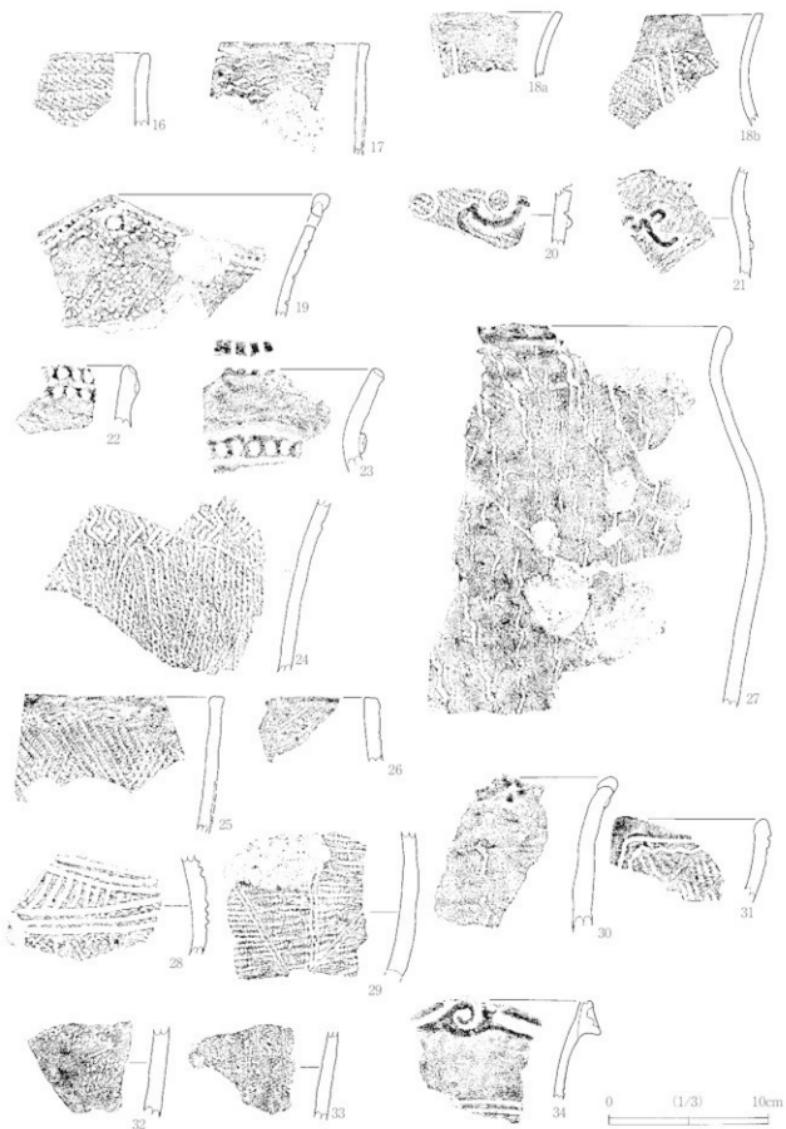
3 出土遺物

T1-II層



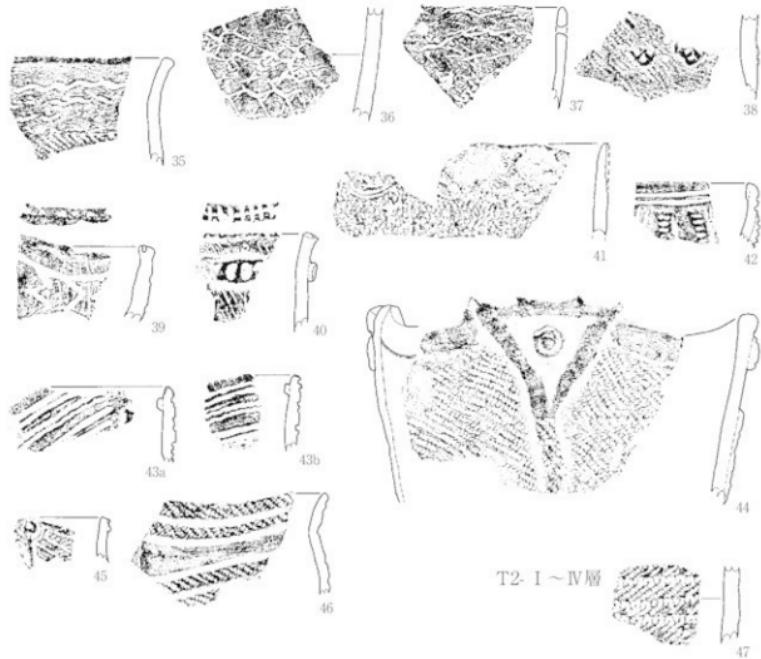
第9図 出土遺物 (2)

## T1- III層

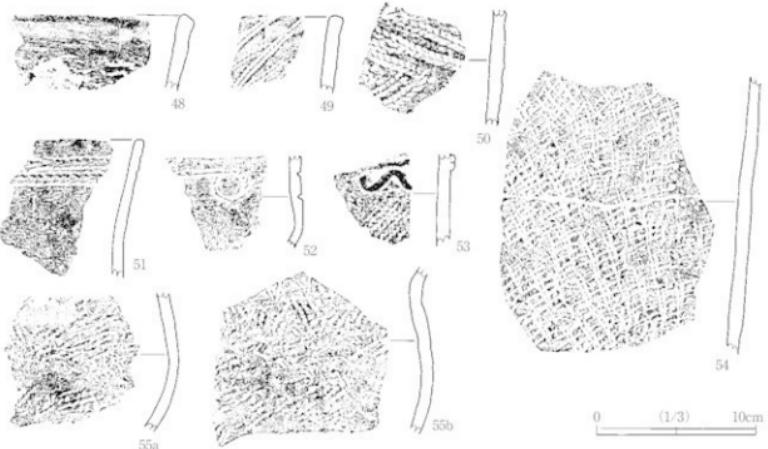


第10図 出土遺物 (3)

## T2- I 層 (盛土)



## T1-4 周辺 - I 層 (盛土)



第 11 図 出土遺物 (4)



第12図 出土遺物(5)

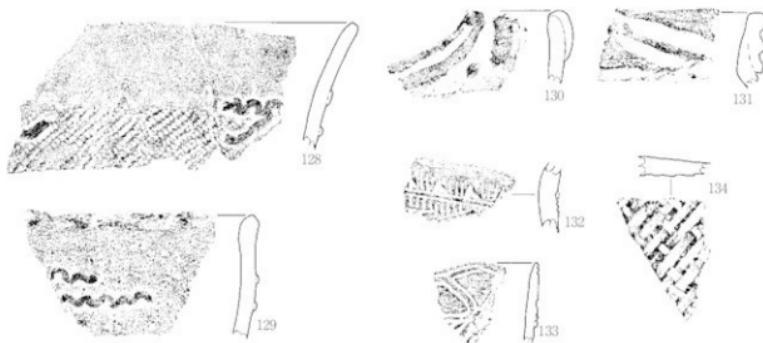
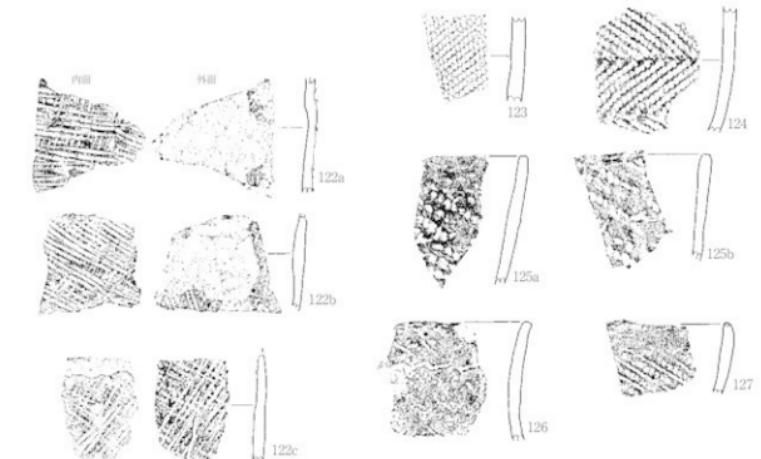


第13図 出土遺物 (6)



第14図 出土遺物 (7)

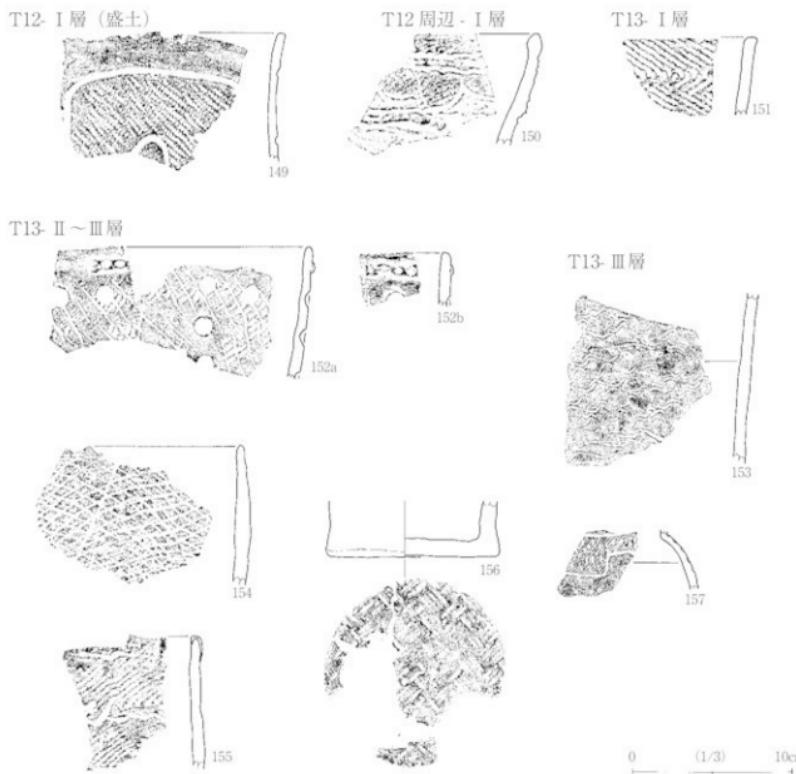
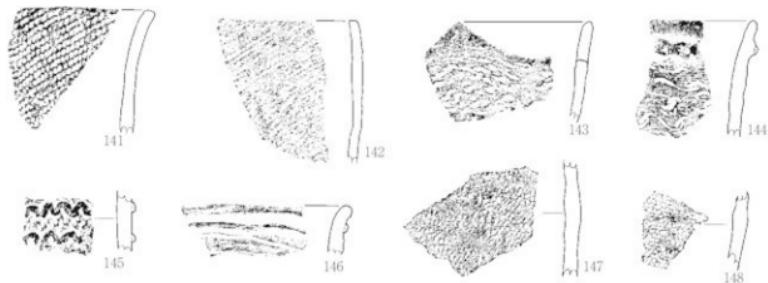
## T11- I層



## T11- I ~ VI層

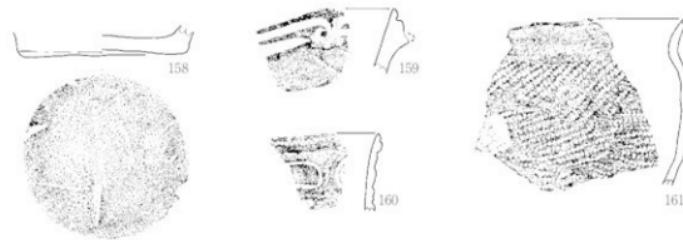


第15図 出土遺物 (8)

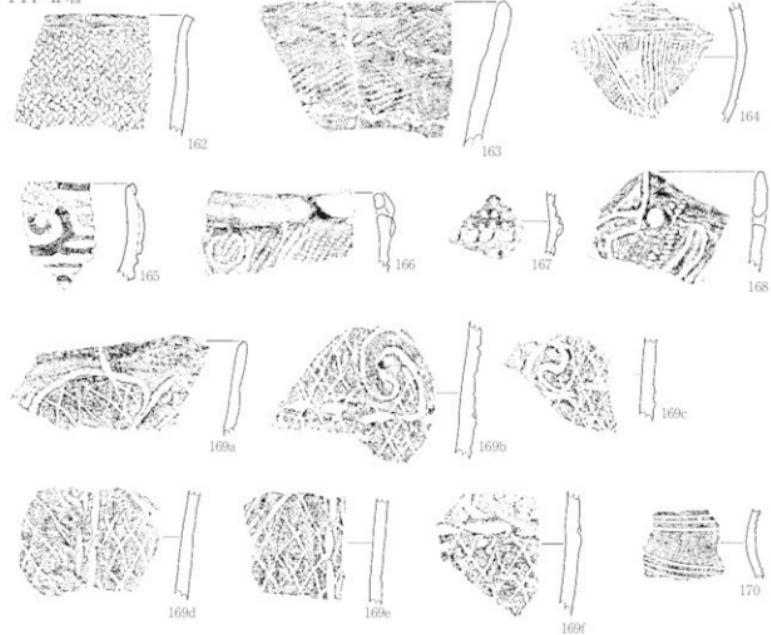


第16図 出土遺物(9)

## T14- I層



## T14- II層



## T14- III層



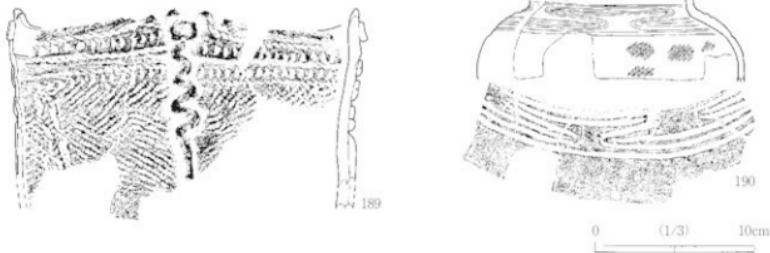
0 (1/3) 10cm

第 17 図 出土遺物 (10)

## T15- I 層

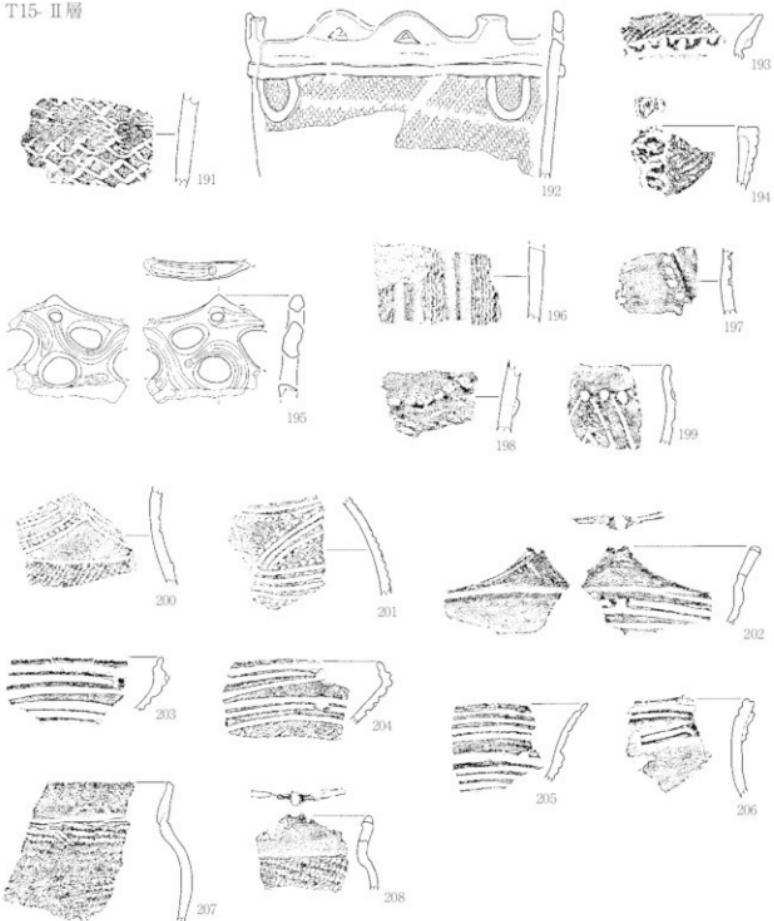


## T15- I・II層



第18図 出土遺物 (11)

## T15-II層

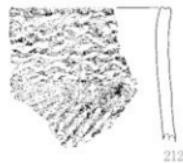


## T15-II~III層



第19図 出土遺物 (12)

T15- III層



211

212

213

214

215

T15- IV層



216

T16- I ~ III層



217



218



219



221



222



223



224



225



226



227

T16- II層



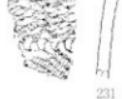
228



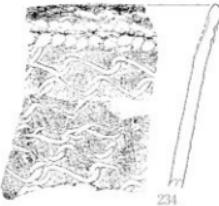
229



230



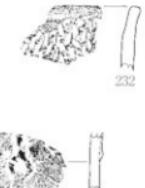
231



234



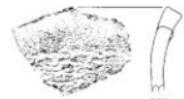
235



236



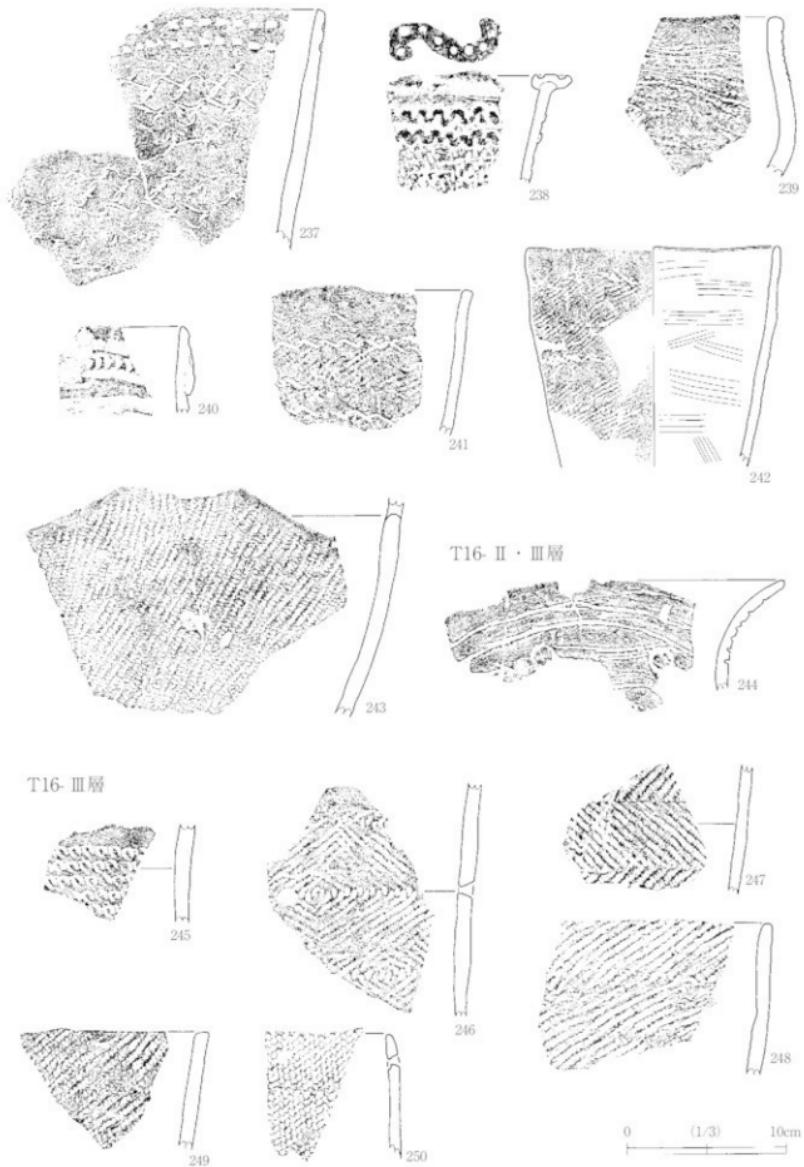
232



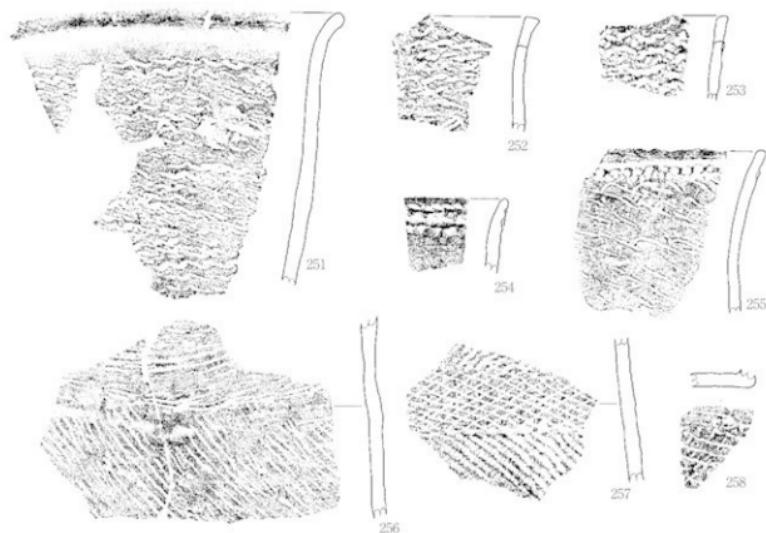
233

0 (1/3) 10cm

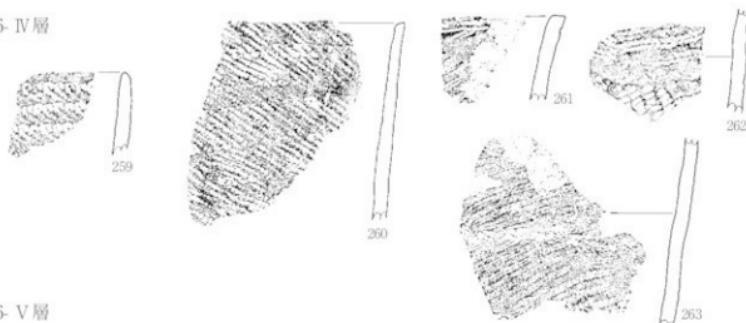
第20図 出土遺物 (13)



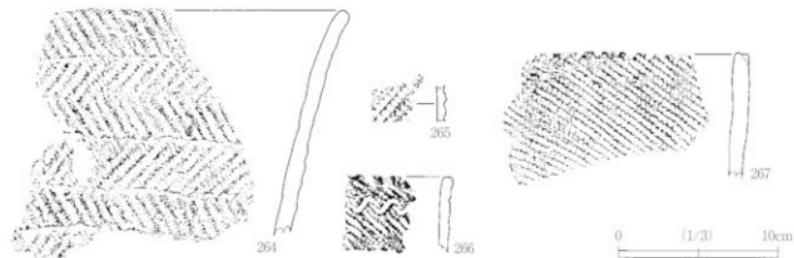
第21図 出土遺物(14)



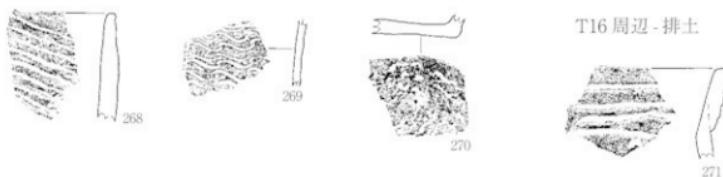
T16- IV層



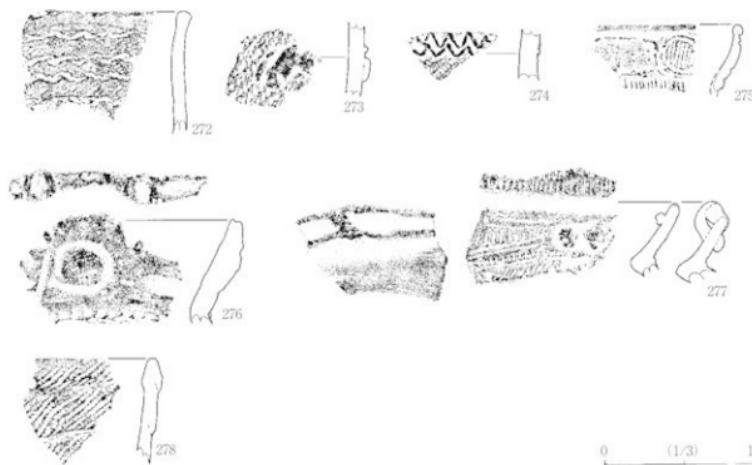
T16- V層



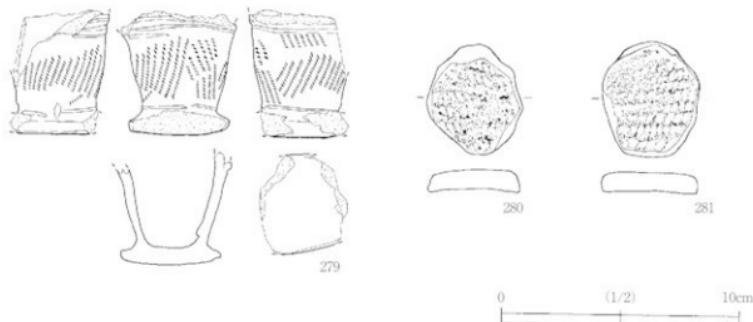
第22図 出土遺物 (15)



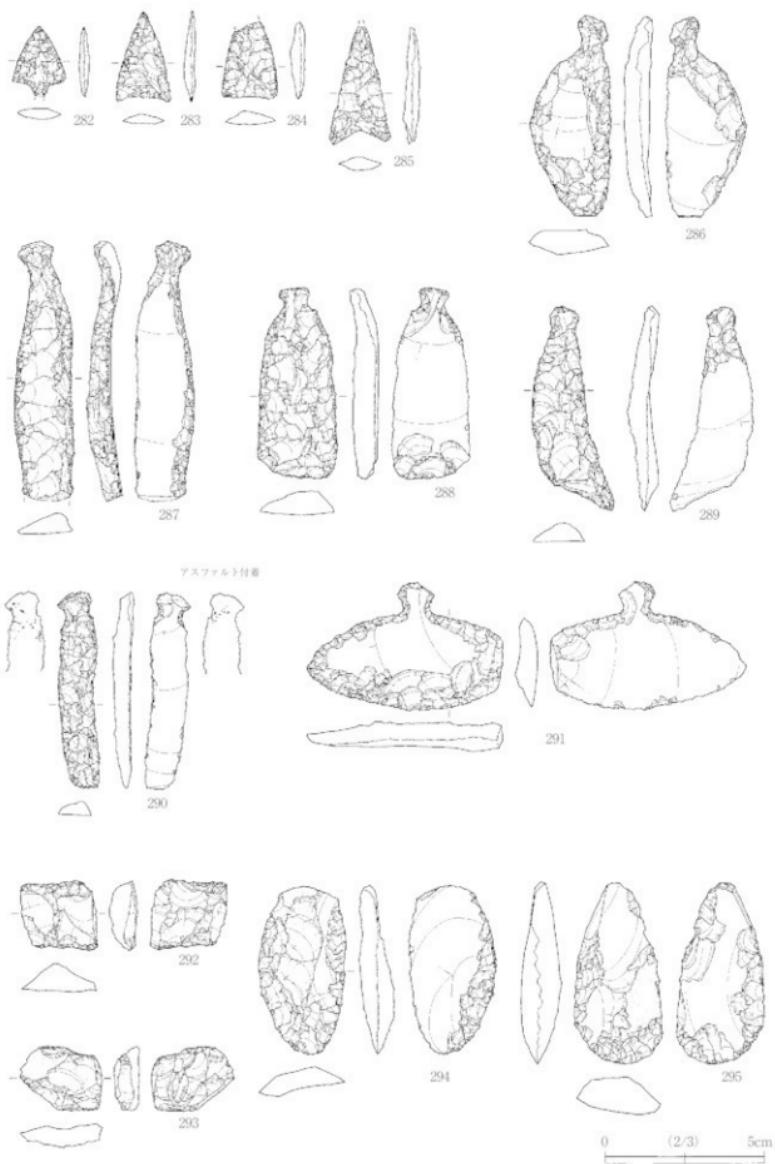
表採・出土地点不明



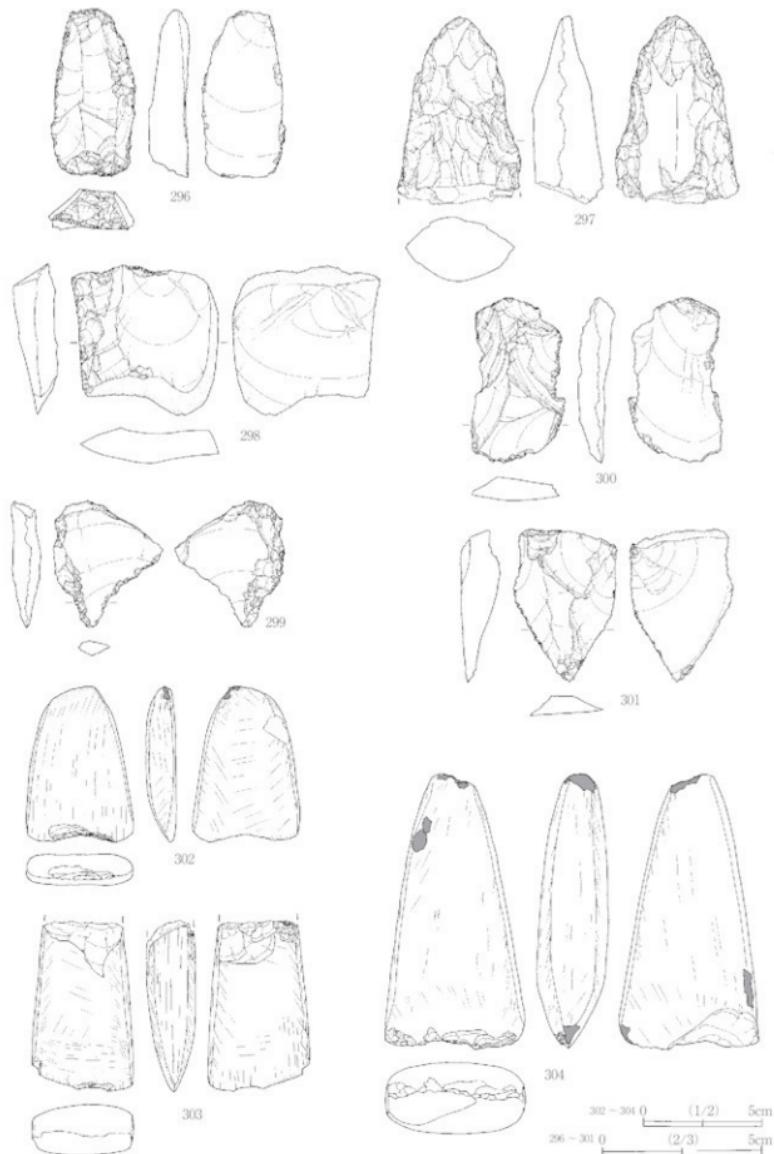
土製品



第23図 出土遺物 (16)



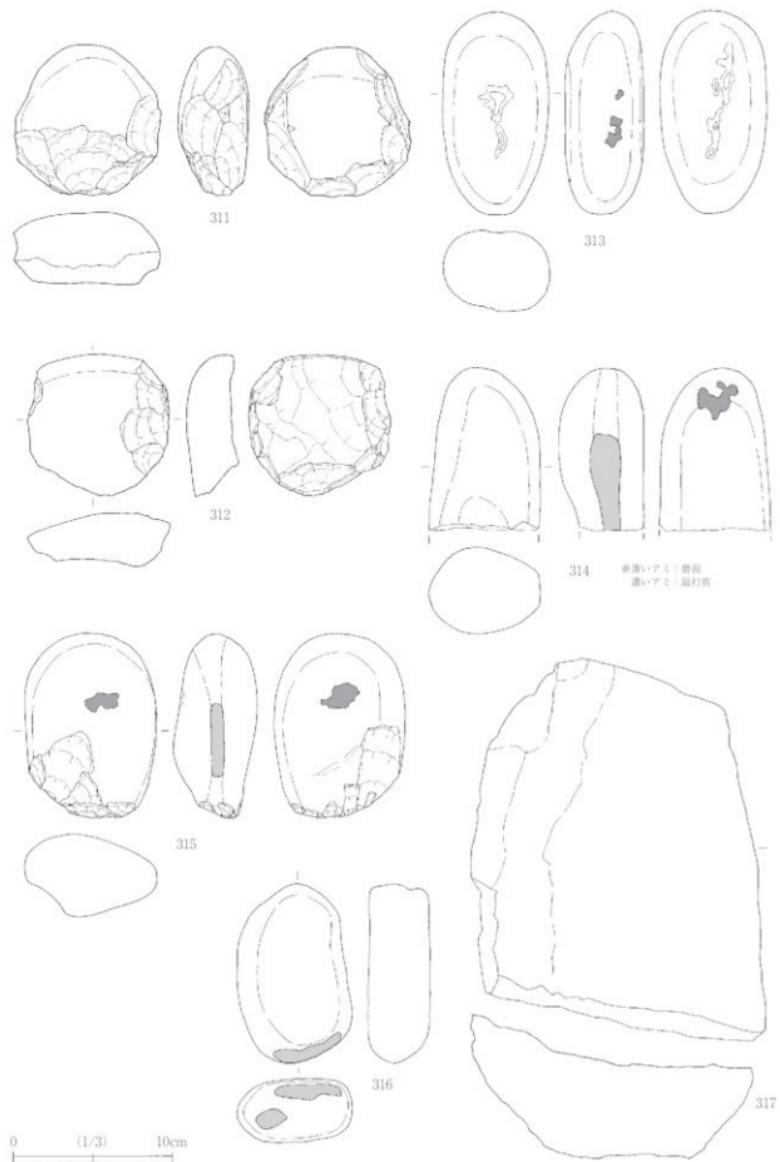
第24図 出土遺物(17)



第25図 出土遺物 (18)



第 26 図 出土遺物 (19)



第27図 出土遺物 (20)









第5表 土器窑址列表

号	出土位置	器形	部位	口沿断面形	文编-地文		产地	出土时间	产地判断	特征	报告号
					内底	外底					
120	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧				新石器时代-晚期	良渚文化	灰陶	E11
131	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
132	T11-1-1号	鼎身	鼎身	圆弧						灰陶	E11
133	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧	A11					灰陶	E11
134	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
135	T11-1-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
136	T11-1-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
137	T11-1-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
138	T11-1-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
139	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
140	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
141	T11-1-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧	A11					灰陶	E11
142	T11-1-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
143	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
144	T11-1-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
145	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
146	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
147	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
148	T11-1-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
149	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
150	T11-1-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
151	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧	A11					灰陶	E11
152	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
153	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
154	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
155	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
156	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
157	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
158	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
159	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
160	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11
161	T11-1-1号	鼎身	二层台面层	圆弧						灰陶	E11
162	T11-1-1号	鼎身	二层	圆弧						灰陶	E11



第5表 土器窑址列表

No.	出土位置	通量	口径直经	口部直经	文博地文		内径直经	外径直经	口径	通量	报告号
					内径直经	外径直经					
195	173—Ⅱ层	深坑	二层灰质				7.0	9.7	2.5	A.5.6	206
196	173—Ⅱ层	深坑	灰质				8.0	10.5	2.5	A.5.9	234
197	173—Ⅱ层	深坑	灰质				8.0	10.5	2.5	A.5.10	231
198	173—Ⅱ层	深坑	灰质				8.0	10.5	2.5	A.5.11	228
199	173—Ⅱ层	深坑	灰质				8.0	10.5	2.5	A.5.12	246
200	173—Ⅱ层	深坑	灰质				8.0	10.5	2.5	A.5.13	240
201	173—Ⅱ层	深坑	灰质				8.0	10.5	2.5	A.5.14	249
202	173—Ⅱ层	深坑	二层灰				8.0	10.5	2.5	A.5.15	271
203	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.16	236
204	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.17	239
205	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.18	239
206	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.19	280
207	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.20	262
208	173—Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.21	206
209	173—Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.22	239
210	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.23	264
211	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.24	235
212	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.25	232
213	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.27	184
214	173—Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.28	209
215	173—Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.29	231
216	173—Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.30	229
217	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.31	132
218	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.32	127
219	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰		实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.33	136
220	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.34	185
221	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.35	137
222	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.36	182
223	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.37	188
224	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.38	201
225	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.39	182
226	173—Ⅰ~Ⅱ层	深坑	二层灰	A.5.1	实用文字		8.0	10.5	2.5	A.5.40	239

第5表 土器觀察表

-50-





## VI 総 括

### 1 縄文時代前期前葉～中葉の土器

今回の調査では斜面に形成された遺物包含層を検出し、縄文時代早期末から弥生時代初頭に至る幅広い時期の土器が出土した。主体は縄文時代前期前葉～中葉、及び前期末～中期初頭段階である。いずれもトレンチ調査のため破片資料が多く全体形状を知り得る個体は少ないが、特にこれまで県内では比較的の出土例の少ない大木1～2 b式段階の資料が一定量得られていることが注目される。以下、前期前葉～中葉の土器様相と、あわせて十和田中振テフラとの関係について若干の検討を加える。

#### (1) 土器の特徴

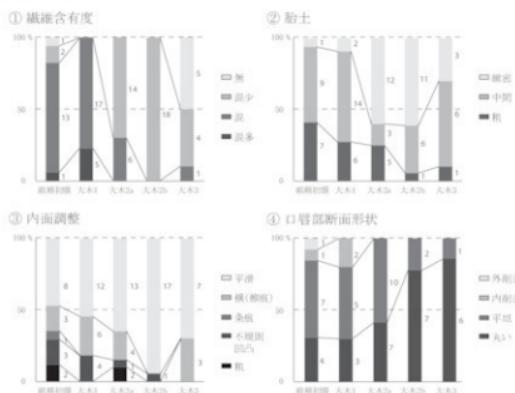
前期初頭から大木3式に至る段階の資料について、相原（1990）、興野（1967～70・1984・1996）、熊谷（1983）を参照し、以下のように捉えた。

＜前期初頭＞ 外面に単節斜行縄文が施文されるものを主体とする。単軸絡条体回転施文（No.268）、「繩の束」回転施文（No.140）、原体圧痕施文（No.82）等の種類が見られ、器面の状態から当該期と判断しているが早期末まで遡る個体を含めている恐れもある。No.135は口縁内面に縄文施文されるが、内面縄文はこの1点のみ。No.122は内外面条痕灰土器である。口縁部に刻目や指頭状の圧痕が加えられるものが含まれる。底部破片ではNo.211の尖底土器がある。

＜大木1式＞ 外面全面に非結束羽状縄文が施文されるものを主体とする。原体は前段多条の使用が多数である。また、横位で使用原体を変えて縄文の条が菱形の構成となるものが含まれる。これに加えて、縄文環付末端、所謂ループ文を多段に回転施文するものが一定量見られる。全体形状が判明する個体がないため、胴部までループ文が展開するかどうかは不明。また、組紐縄文、所謂ピッチリ縄文を施文するものも当該期と判断した。

＜大木2 a式＞ 口縁部に多段の結節回転文が施されるものを主体とする。これに加えて、単軸絡条体第5類を横位回転施文するもの、口縁部から胴部にかけて組紐回転文を施文するものが見られる。組紐原体は3本丸組紐と4本丸組紐の種類がある。

＜大木2 b式＞ 所謂、S字状連鎖沈文地文の土器群である。口縁部に隆帯を巡らすものの、隆帯の上下に刺突列点を加えるもの、隆帯を省略して刺突列のみが口縁部に巡るものがある。地文が施文される



第28図 縄文前期前半土器の属性

器面は擦痕が顕著に見られ、乾燥が進み硬化した状態と思われる。No 98 は地文に単節斜行縄文を使用し、口縁部の突起下から隆線が垂下する。器面の状態から当該期と判断した。この個体を除くと、施文手法はもとより、器面の状態や胎土の特徴等、共通性が高い一群と捉えられる。

＜大木 3 式＞ 深く引かれた沈線による円文、弧状文等を特徴とし、口縁部直下に巡る圧痕や刻目入り隆帯（No 19・80・152）、胴部の粘土紐による隆線文（No 20）等の文様要素が見られる。

当該土器群の文様・器形については上記の通りだが、更に土器製作に関わる属性（胎土、纖維含有、内面調整）及び口唇部断面形状の 4 項目について集計した結果を第 28 図に示した。ここでは、各属性共に時期が下るにつれて漸移的に、かつ連続的に変化する状況を捉えることができる。その中でも、①「纖維含有」については大木 1 式を頂点として混入度が減少し、大木 3 式段階では纖維を含まない土器が半数に達する。胎土が粗質で内部の纖維が目立つことと連動している可能性もあるが、大木 1 式と大木 2 a 式の差が大きいことが指摘できる。③「内面調整」では平滑に仕上げられた土器の増加傾向が明瞭である。④「口唇部断面形状」では内外面のどちらかに傾斜を持たせた内削ぎ、外削ぎが大木 2 a 式で途絶え、また大木 2 a 式から大木 3 式段階にかけて平坦から丸へという変化が見てとれる。特に口唇部が角張る要素は大木 2 a 式の特徴として把握できる。上記のような諸属性の漸変傾向はこれらが一系統のもとに連続して変遷したことを示すと考えられる。

## （2）出土状況（十和田中振テフラとの関係）

試掘トレンチのうち T 13・14・15・16において To-cu が見られる。産状はいずれも黄褐色のブロックが黒褐色土中に混入している二次堆積と見られる。出土量が多く擾乱の影響が少ないと思われる T 16 では表土 I 層を除くと上位から To-cu 上位の II 層、To-cu ブロックを含む III 層、To-cu 下位の IV・V 層と 3 分される。各層出土土器を概観すると（第 20～23 図）III 層では大木 1 式、2 a 式を主体とし 2 b 式を少数含む。IV～V 層では大木 1 式主体、2 a 式、2 b 式を少数含む。この事例からは To-cu と土器編年の関係を完全に把握することは不可能だが、大木 2 b 式段階での To-cu 降下の可能性が高いものと思われる。星・茅野（2006）は To-cu 上位・下位の土器群を整理し、大木 2 b 式段階のうちにテフラ降下が発生したと捉えた。今回の屋形遺跡調査もこれを追認するものと考えられる。

## 2 屋形遺跡の性格（予察）

今回の限られた調査内容から屋形遺跡の全容を記すことは不可能であるが、斜面に形成された遺物包含層の様相から推測される事柄を以下に記載する。

＜包含層＞ 今回の調査は、遺跡北東部の斜面に任意の試掘トレンチを設定し、大規模な遺物包含層の存在を確認した段階でとどまった。近現代の造成により斜面下部は大きく地形改変され包含層自体も削平を受けている部分が広いものの、南西側の斜面上部は良好な状態で残存している。層下部には十和田中振テフラが含まれ、この上下から縄文時代前期を中心とした遺物が出土している。また包含層内に廃棄された焼土ブロックが分布する状況も確認した。

各トレンチ別の土器出土量では斜面上部に位置する T 10・11・15・16 に集中する状況である。一方、南側の T 17～19 では遺物出土を見ない。このことから遺物包含層の主体は調査区西側に位置する宅地付近の平坦面落ち際から北東斜面にかけて形成されているものと考えられる。

包含層が形成された時期は第 IV 章と前節に記したように、出土土器から見て縄文時代早期末～後期

前葉、及び縄文時代晩期末～弥生時代初頭にわたる非常に幅広いものである。特に縄文前期前葉～中期初頭がその主体となる。一方、縄文中期中葉、また後期中葉～晩期末にかけては見かけ上空白時期と捉えられる。以前の表探資料では縄文後期後葉の土器片も確認されているので（日下2001）この間、集落内の捨て場が位置を変えている可能性がある。

＜平坦面＞ 以上のような急傾斜の斜面地に形成された遺物包含層の存在、特に限定されたトレンチ内での遺物出土量の多さ、また包含層中の廐棄焼土ブロックの存在を考えると、斜面上の平坦面には大規模な集落跡が存在している可能性が高い。釜石市教育委員会が平成24年度冬期に実施した今回の設計路線内の試掘調査結果でも相当数の遺構の存在が確認されており、当初の計画通りに台地上の発掘調査が実施された場合には、居住域を含めた縄文時代前期～中期に至る時期の集落跡中心城、もしくは少なくとも集落跡の南側が姿を現すものと思われる。また標高20～35mにかけての平坦面は、海浜に舌状に張り出した台地上に直径100m程度に広がっており、該期の拠点的な集落の特徴を考慮すると遠野市綾織新田遺跡（遠野市教委2002）、奥州市大清水上遺跡（岩手県埋文2006）に典型的に見られるような、放射状、環状に大型住居跡が配置される集落構造も考えられる。

＜立地と拠点集落＞ また以前の屋形遺跡表探遺物の中には、大型の縄文前期末板状土偶（日下2001）、石製装身具、鯨骨製骨刀、搬入土器と考えられる円筒上層c式土器（森2007）等が含まれる。これらの出土地が限定される祭祀的な遺物の豊富さや遠隔地との交流を示す遺物、加えて絶対的な遺物量の多さ等から考えれば、屋形遺跡は少なくとも縄文時代前期～中期においては小白浜遺跡（釜石市教委2006）等と並び唐丹湾岸における拠点集落の一つであったと捉えることができよう。第Ⅱ章で記載したように、当方の沿岸では限定される小湾に面した居住適地に遺跡が立地する。存続期間の長さと限定的な立地条件から見て、屋形遺跡集落は長期間にわたって連続と利用され続けた土地であるとの感触を持っている。なお今回の調査では海産資源との関わりを示す資料は確認していないが、生業の展開を視野に入れた検討も不可欠であろう。今後実施される予定の平坦面上の調査、及び斜面に形成された遺物包含層の調査を経て、屋形遺跡の内容がより明らかになると期待される。

## 引用・参考文献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台清周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』 第76卷第1号 p.1-65
- 阿部明彦 1986 「大木2b式における「S字形状鉗撲系文」の原体復元」『山形考古』 第4卷第1号 p.54-62
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 「大清水上遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第475集
- 釜石市教育委員会 2006 「小白浜遺跡発掘調査報告書」 釜石市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 釜石市教育委員会 2007 「釜石市道跡詳細分布調査概報V」 釜石市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 興野義一 1967～1970 「大木式土器理解のために（I）～（VI）」『考古学ジャーナル』 No.13・16・18・24・32・48
- 興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究』 第1巻考古学篇 p.173-190
- 興野義一 1996 「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」「画竜点睛－山内清男先生没後25年記念論集－」 p.215-224
- 日下和寿 2001 「上閉伊郡の土偶」『岩手県立博物館研究報告』 第18号 p.19-27
- 熊谷常正 1983 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立－条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ」『岩手県立博物館研究報告』 第1号 p.45-65
- 遠野市教育委員会 2002 「新田II遺跡」遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 星雅之・茅野嘉雄 2006 「十和田中報テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相」『植生史研究』 特別第2号 p.151-180
- 森一欽 2007 「釜石市屋形遺跡採集の円筒式土器について」『列島の考古学II－渡辺誠先生古稀記念論文集－』 p.75-80
- 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」先史考古学会

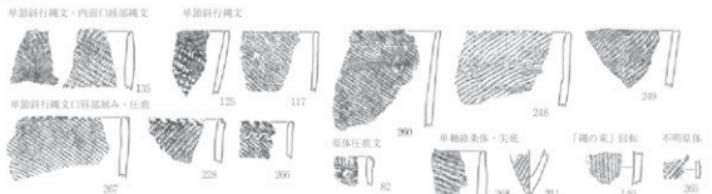
早期末～前期初頭



122

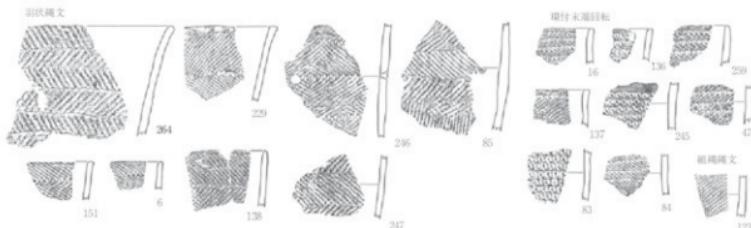
内外混条文

前期初頭



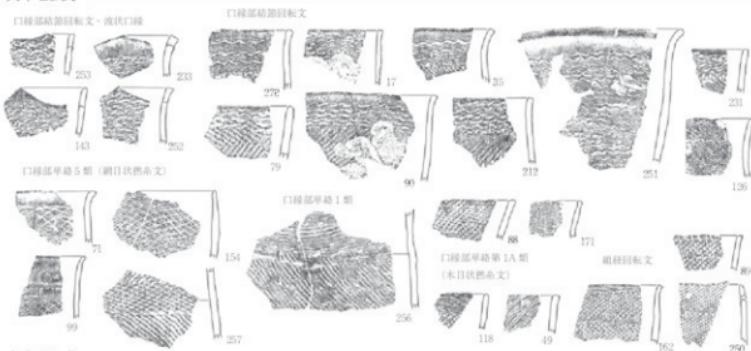
367

大木 1 式



151

大木 2a 式

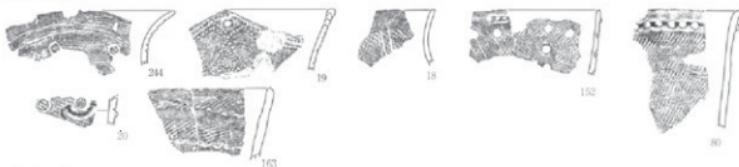


大木 2b 式

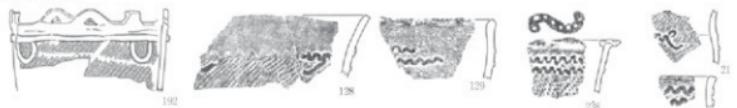


第 29 図 出土土器集成（1）

## 大木 3式



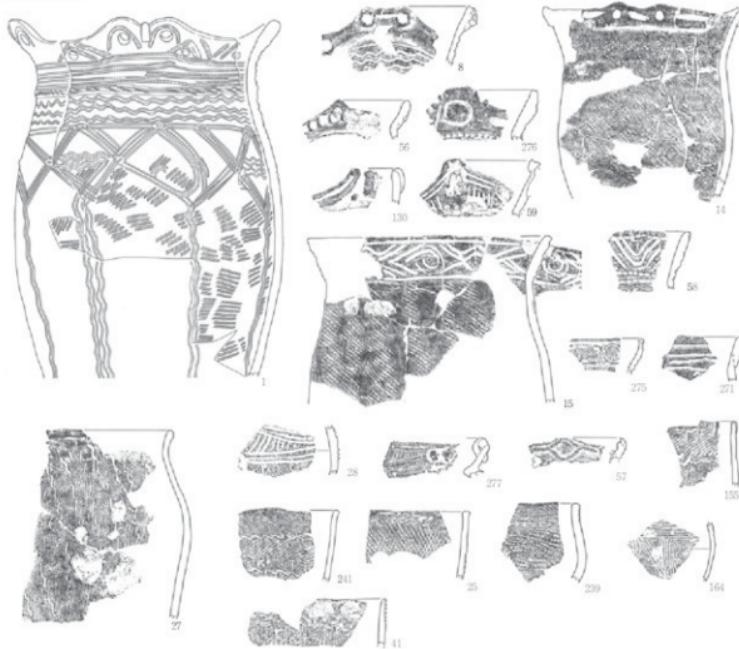
## 大木 4式



## 大木 5式

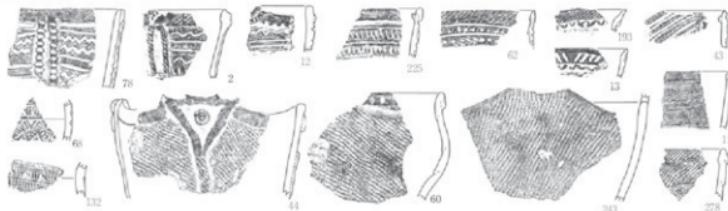


## 大木 6式



第30図 出土土器集成（2）

## 大木 7a 式



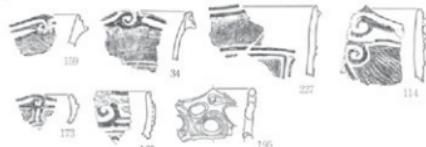
## 大木 7b 式



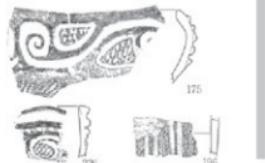
## 大木 8a 式



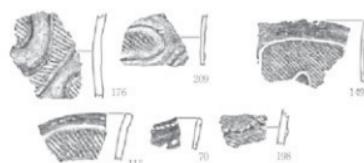
## 大木 8b 式



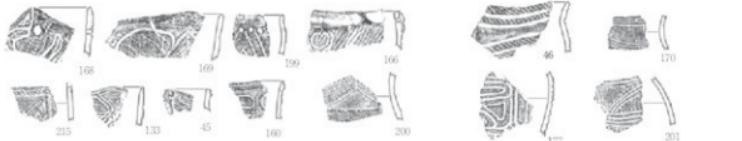
## 大木 9 式



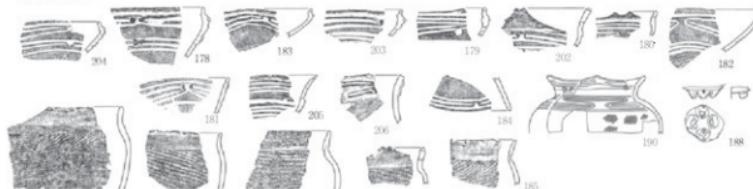
## 大木 10 式



## 後期初頭



## 弥生前期



第31図 出土土器集成（3）

写 真 図 版





調査前 (N → )



終了時 (NW → )



終了範囲 (SW → )

写真図版 1 調査区全景



T1 (NW →)



T2 (NW →)



T3 (NW →)



T6 (NW →)



T11 (NE →)

写真図版2 トレンチ断面（1）



T12 (NW →)



T13 (SE →)



T14 (SE →)



T15 (E →)



T16 (E →)



T16 (N →)



T17 (NE →)



T19 (SW →)

写真図版3 トレンチ断面 (2)



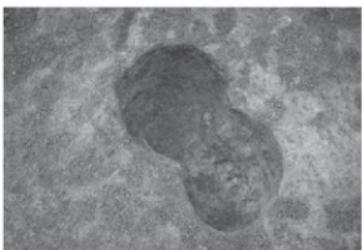
柱穴状土坑 P1 断面 (E → )



柱穴状土坑 P1 完掘 (E → )



柱穴状土坑 P2 断面 (E → )



柱穴状土坑 P2 · 3 完掘 (E → )



斜面下平坦部終了状況① (E → )



斜面下平坦部終了状況② (SW → )



調査区南東端検出状況 (N → )

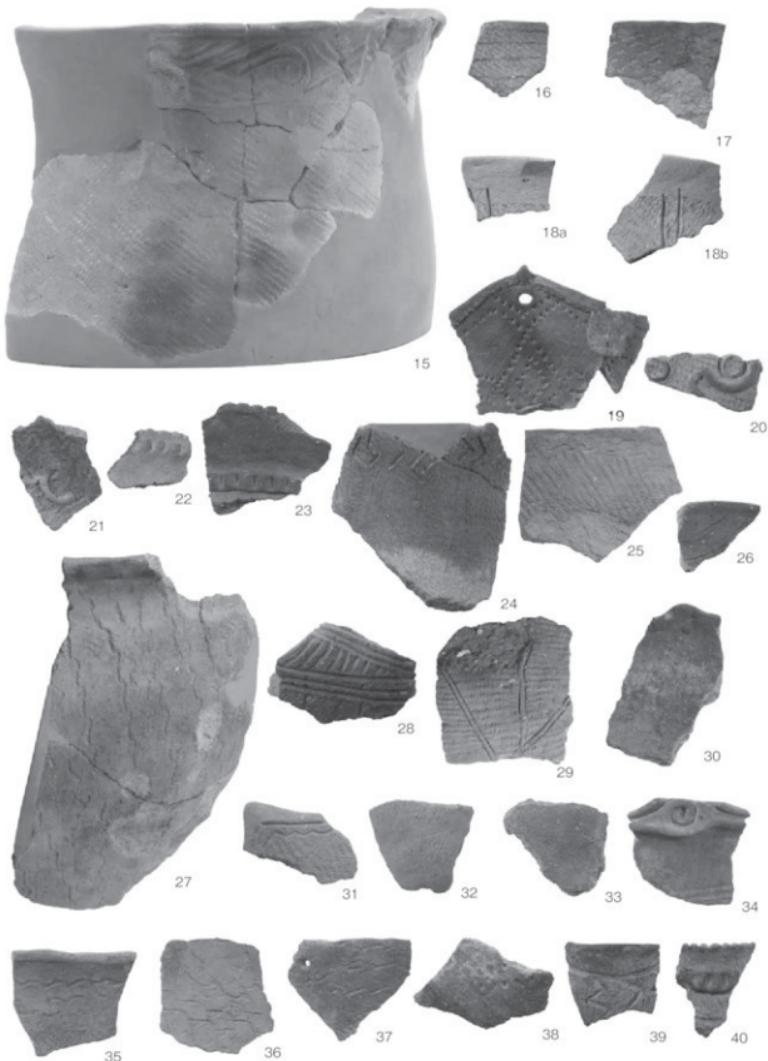


調査区終了状況

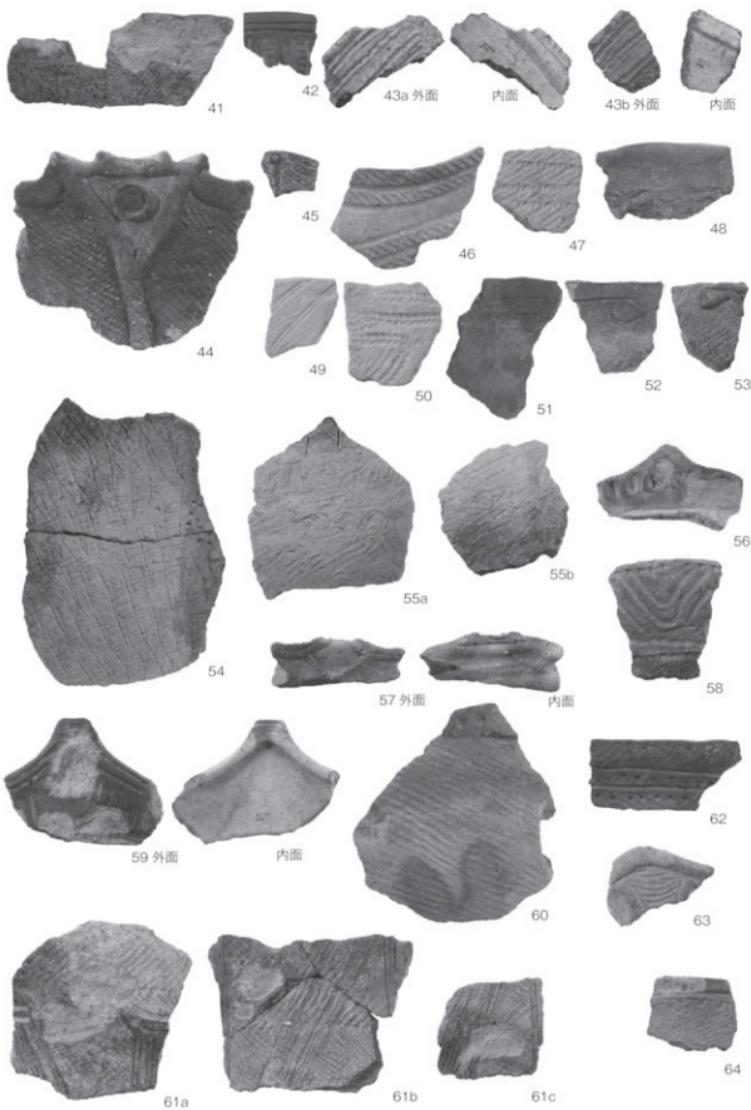
写真図版 4 柱穴状土坑、検出・終了



写真図版5 出土遺物（1）



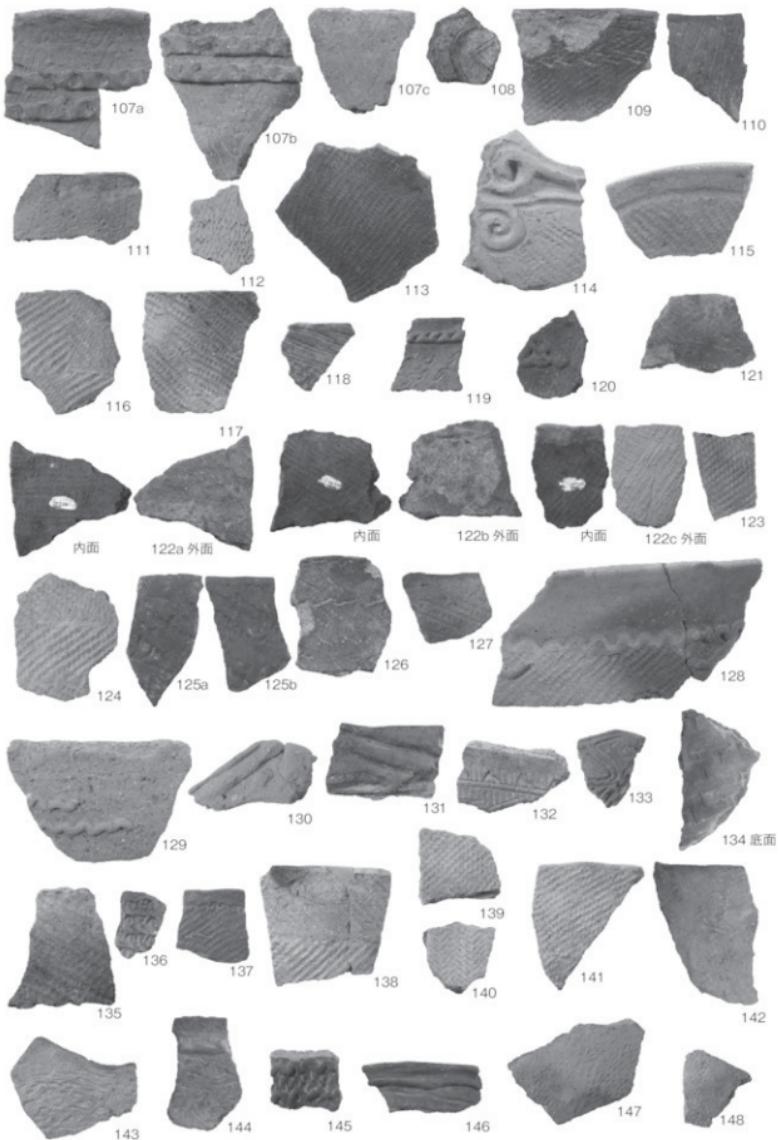
写真図版6 出土遺物（2）



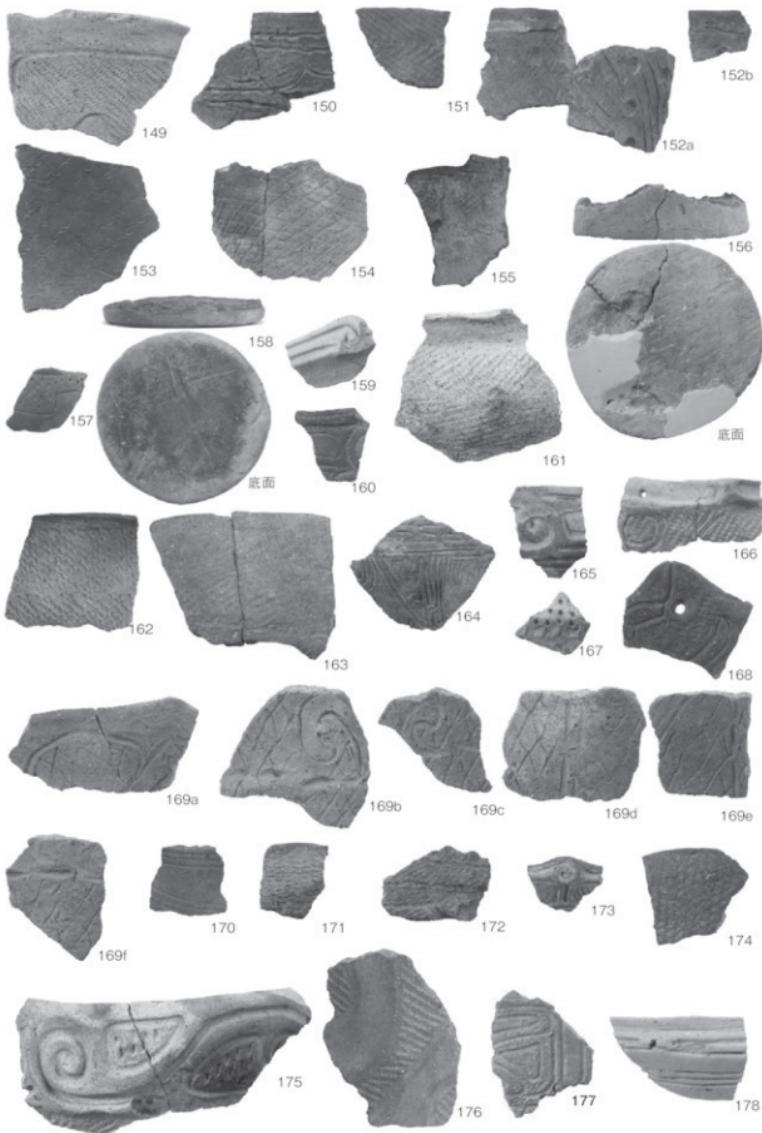
写真図版7 出土遺物（3）



写真図版8 出土遺物(4)



写真図版9 出土遺物（5）



写真図版 10 出土遺物 (6)



写真図版 11 出土遺物 (7)



写真図版 12 出土遺物 (8)



写真図版 13 出土遺物 (9)



279



281



282



283



283



284



285



286



287



288



289



290



292



291



294



295



296



写真図版 14 出土遺物 (10)



297



298



299



300



301



302



303



304



305



306



307



308



309



310

写真図版 15 出土遺物 (11)



311



312



313



314



315



316



317

写真図版 16 出土遺物 (12)

## 報告書抄録

ふりがな	やかたいせきはつくちょうさほうこくしょ							
書名	屋形遺跡発掘調査報告書							
副書名	漁業集落防災機能強化事業（大石地区）関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第629集							
編著者名	高木晃・野中裕貴							
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2014年3月14日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
やかたいせき 屋形遺跡	やかたいせき 屋形 釜石市唐丹町 字 屋形	市町村 03211	遺跡番号 NG03-0060	39度 10分 55秒	141度 53分 41秒	2012.10.09～ 2012.11.28	700 m <sup>2</sup>	漁業集落 防災機能 強化事業 (大石地区)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
屋形遺跡		縄文時代	堅穴住居跡 柱穴 遺物包含層		縄文土器・土偶・石器			
要 約	おもに縄文時代前期から晩期にかけての大規模な捨て場が広がっていることが判明した。今回の調査では、この縄文時代の捨て場となっている斜面地にトレンチを入れ、大まかな層序と遺物の関係を把握した。また、削平や流出によって遺物包含層が希薄となっていた沢地形の中央部分を完掘した。							

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第629集

## 屋形遺跡発掘調査報告書

漁業集落防災機能強化事業（大石地区）関連遺跡発掘調査

印 刷 平成26年3月14日

発 行 平成26年3月14日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県釜石市

〒 026-8686 岩手県釜石市只越町3丁目9番13号

電話 (0193) 22-2111

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印 刷 有限会社 博光出版

〒 020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電話 (019) 641-0671





